

42045

教科書文庫

4
810
41-1933
200030
2349

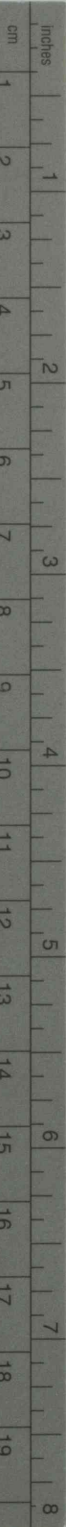
5.8
1933

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

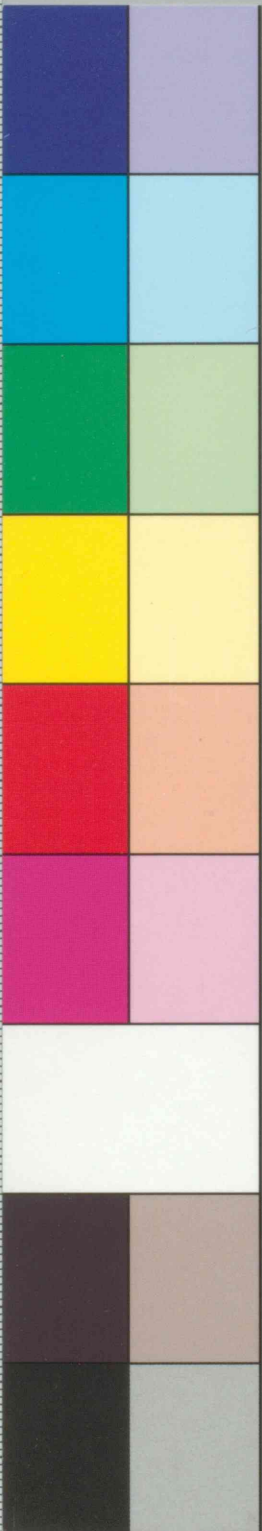
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



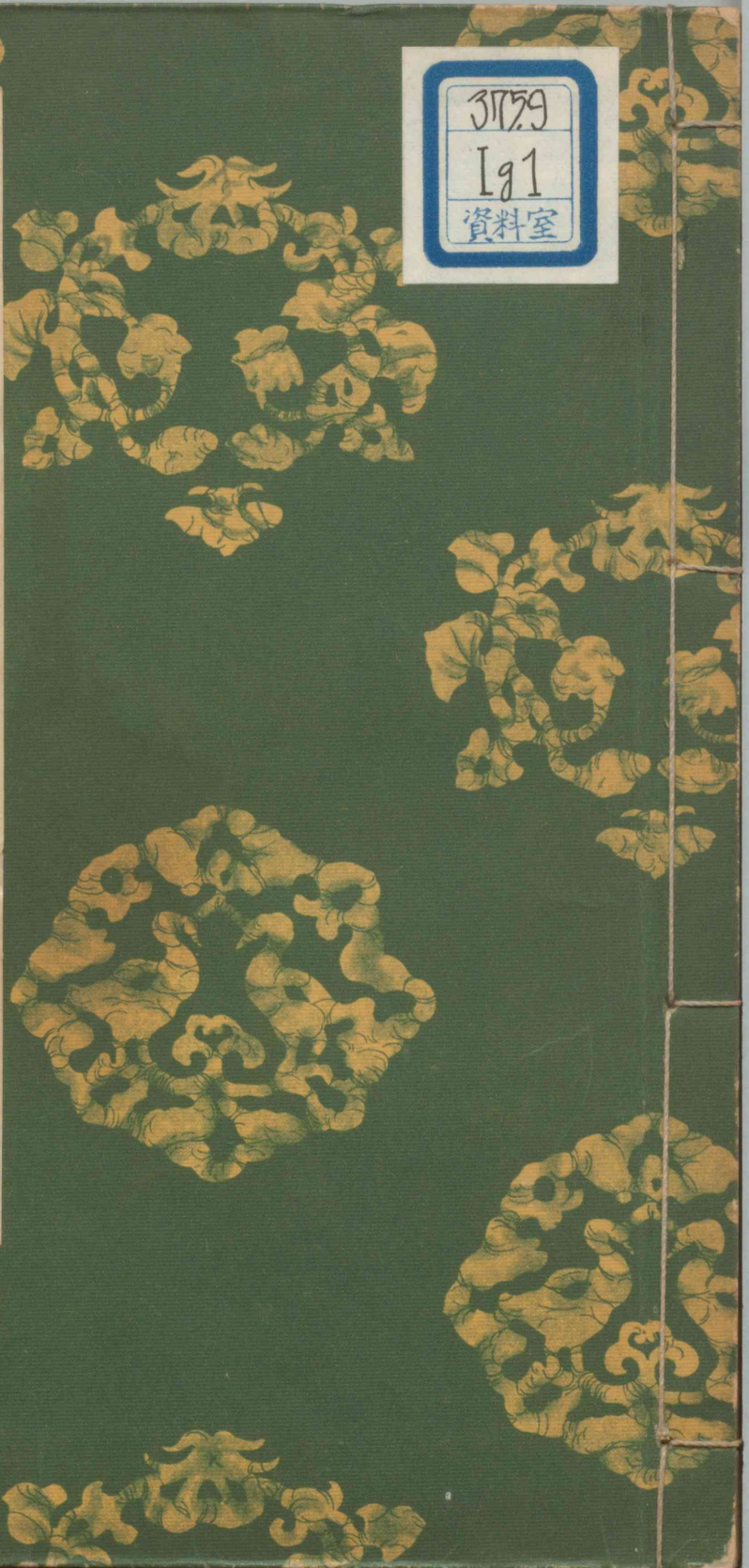
3759
Ig1
資料室

紙正國語讀本

五十嵐の海



巻八



圖の帶束



(照參内參の卿頼光四一)

資料室

3759
I91

横廣
氏云

用科文漢語國校學中 日一十二月二年八和昭
用科語國校學業實 日一月九年八和昭

濟定檢省部文

文學博士 藤田鳴鶴 著

純正國語讀本

新刊版

廣島大學 教 40286

廣島大學 圖書印

純正國語讀本卷八

目次

- 一 宗湛日記の豊太閤……その一……………一
- 二 宗湛日記の豊太閤……その二……………九
- ③ 中宮寺の観音……………和辻哲郎……………一九
- ④ 二千石……………(狂言)……………三五
- ⑤ 我が名の徳…………………………三九
- ⑥ 花はさかりに……………兼好法師……………四三
- ⑦ 知と愛……………西田幾多郎……………四七
- ⑧ 擬古小品…………………………四七
- 一 蚊遣火…………………………中島廣足

二	蟲の音	石川依平
三	所感ありて記す	伴蒿蹊
九	山庵雜記	北村透谷
〃	高名の發句	十一俳家
二	松島より平泉へ	松尾芭蕉
二	中尊寺を訪ふ	三宅雪嶺
三	人生の快事	(平治物語)
四	光頼卿參内	十四歌人
五	新古今集より	雄辯そゞろごと
六	雄辯そゞろごと	羅馬の二雄辯
七	羅馬の二雄辯	狭き國は廣く、峻しき國は平けく
八	狭き國は廣く、峻しき國は平けく	

一九	銀の猫	上田秋成
二〇	唐船の前の實朝	坪内逍遙
二一	山家と金槐	西行法師
一	山家集より	源實朝
二	金槐集より	奥田正造
二二	茶道の精神その一	奥田正造
二三	茶道の精神その二	奥田正造
二四	我が三大國民道その一	
二五	我が三大國民道その二	

目次終

Table of contents with numbered entries and page numbers, including '山家' and '宗湛日記'.



純正國語讀本 卷八

一 宗湛日記の豊太閤 その一

牢記する。微賤より起つて天下を掌握し、位人臣を極めた。豪放雄大な趣味

とまわぬことありて

豊臣秀吉の表立つた功業は、すべての歴史が之れを傳へ、全國民の記憶がその概略を牢記して居る。彼れは尾張國中村の微賤より起つて天下を掌握し、位人臣を極めた。彼れは織田信長の後を承けて國亂を鎮定し、國威を海外に輝かした。彼れは一己独自の豪放雄大な趣味を懷き、之れを建築繪畫その他の藝術に表現せしめて、一種特別の時代文化を成就した。是等は諸方面の歴史が争つて傳へて居る所で、彼れが是等の點に於いて偉大なる事は言ふまでもないが、彼れが裏面、側面の生活も、其の面白味に於いて、決

一 宗湛日記の豊太閤 その一

凡そ

一

繕はぬ生地がそのまゝ現はれた趣があり、自然兒としての根本性が如實に發露した趣がある。

藝に遊ぶ自由な趣味性と、豪放磊落な諧謔性とを有つてゐた。

一筋繩に行かぬ當時の群雄を駕御した。

乳母が大玉として育つた
のかわらぬこと

コック味

して之れに劣るものではない。のみならず、彼れが母や妻子を相手とし、近臣、寵商、遊藝の徒を相手としての日常生活には、繕はぬ彼の生地がそのまゝ、現はれた趣があり、自然兒としての彼の根本性が如實に發露した趣があり、往々にしては、其の生地の根本性が偉勳大業の素因を成して居る事を暗示する趣もあつて、寧ろ表面功業の記述に優る趣味を湛へて居るかのやうにも見える。

彼れは情に厚い一種の優しさを持つてゐた。藝に遊ぶ自由な趣味性と、豪放磊落な諧謔性とを有つてゐた。而してこれら側面の附屬性が、其の正面中心の偉大性と絡み合ひ助け合つて、一筋繩に行かぬ當時の群雄を駕御せしめ、彼等の硬化したる割據性を融和せしめて、あのこじれ切つた亂世を統一することが出来たのであらう。殺伐な戦争に一種の春温を與へて、引きつゞく遠征長陣をも無事に續けることが出来たのであらう。天政所や、淀君や、三

利休や、宗湛やを、ころりと手に入れると同じ呼吸で、毛利をも、島津をも、徳川家康をも、事なく幕下に參ぜしめたのであらう。



吉秀臣豊の年晩

候て可給候。頼み申候。

成や、利休や、宗湛やを、ころりと手に入れると同じ呼吸で、毛利をも、島津をも、上杉景勝をも、伊達政宗をも、のみならずあの徳川家康をも、事なく幕下に參ぜしめたのであらう。彼れは天正十八年、小田原陣中から大阪なる母の大政所に左の手紙を送つた。

「返す、我が身事御案じなさねまじく候。一段と息災にて五膳もあがり候まゝ、御心やすく候べく候。そもじ様、御遊山候て、氣をも慰み、わか、御成り

天政所や、淀君や、三

天真流露
天の白雲を本
かひなき一
も味り、深
あらはんこと

身も世も忘れた
やうに、趣味に
慰み、藝に遊ん
で居る。

孝子の至情を現はしたと云はれる名高い手紙であるが、その至情が何の巧みもなく無造作に現はれて居るところが面白い。天真流露とはかういふので、之れを見た大政所の悦びも思ひやられる。彼れは曾て夫人淺野氏に書を寄せて、かう云つた。
「返すく、一段と能をし申候へば、一段とくたびれ候て、迷惑申候。……やがてく、参り、御物語り可申候。そなたにても、能をいたし候て、又見せ可申候。御待ち候べく候。」
「昨今は一層能に精を出して居るので一層草臥れて困つて居る。その爲めつい無沙汰に成つて相すまぬが、其中そつちへ行つてゆるく、物語もするであらう、能もして見せるであらう。待つて居らるゝがよい。」戦争の最中、或は戦争がやうやく鎮まりかけたばかりの物騒期にもう身も世も忘れたやうに、趣味に慰み藝に遊んで居る所が面白いではないか。暢氣なものであるが、この磊落

困る
不都合

苦々しく思ふ。

な暢氣性があつたればこそ、あの永續的努力も出来たのであらう。彼れは戰場に於いても、好んで能を演じ、或は物真似の芝居をした。天正十八年の北條征伐の時には、野陣に幕を打ちまはして、盛んに能を演じてゐたが、中には之れを苦々しく思ふ者もあつた。しかし正面から諺り諫むる者もなく、その前を通る諸將は皆下馬して禮をして行き過ぎたが、或る時浮田中納言秀家の家來の、花房助兵衛といふ侍が、下馬もせず兜をも脱がずに、其の前を通り過ぎんとした。番卒が見咎めると、助兵衛は馬上のまま、大音聲を張り上げて、
「戦場で能をするやうな、たはけた大將に、禮をするに及ばうや。」と云つて、秀吉の座の方角に向つて、かつ！と唾を吐きかけて通り過ぎた。
番卒は直ちに秀吉に言上した。秀吉の憤つたことは勿論であ

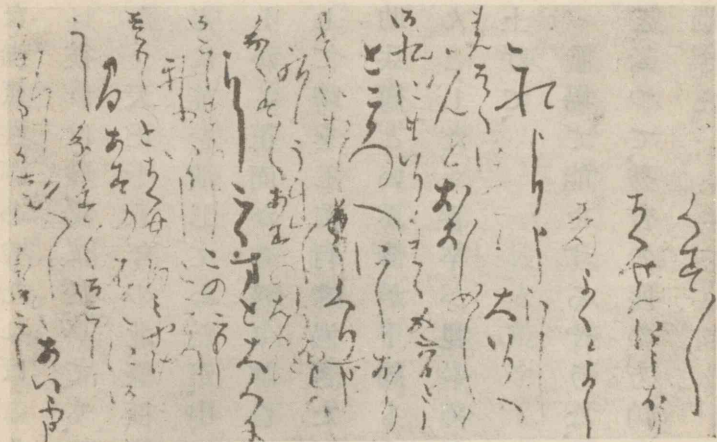
る。彼れは直ちに秀家を呼んで「助兵衛を斬り捨てよ。」と嚴命した。

秀家が畏つて駈け出して、半町ばかり行くと、呼び戻して、

「助兵衛は天晴れの侍である。切腹を申しつけよ。」

と云つた。秀家が畏つて、辭して又行くと、半町も行くか行かぬに、又呼び戻して、

「今、天下に、此の秀吉に向つてかやうの放言をする者があらうとは思はれぬ。かやうな大剛の侍を殺すのは惜しい。加増して取らせよ。」



豊太閤筆蹟

洒落な趣味

もつたあ、わらわち
いた腸な趣味

すべてが土から掘り出したやうである。無邪氣で、眞率で、何の芥蒂もなく、躊躇もない。

名護屋

肥前松浦郡

と云つた。長陣の野陣に幕打つての演能も洒落な趣味で面白いが、嚇と怒つて「打首にせよ」といふ、考へ直して「切腹を申付けよ」といふ、つゞいて今度は「加増してやれ」といふ。この晴天に霹靂し、驟雨に日影を見るが如き無造作の急變が、實によく彼れが生地の根本性を現はしてゐるではないか。すべてが土から掘り出したやうである。無邪氣で、眞率で、何の芥蒂もなく、躊躇もない。そしてその根底には趣味があり、愛があり、而して天地を蔽ふ偉大なる英雄魂がある。

彼れは文祿の役にも、名護屋の陣所で、かやうな類の遊興に慰んだ。三年の六月二十八日の事である。彼れは瓜畑の體を廣々と作らせ、その一部に瓜屋、旅籠屋を粗末にしつらはせて、そこへ、柿色の帷子、藁の腰篋、黒の頭巾、菅笠といふ扮装で、「味よしの瓜召され候へ。召され候へ。」

宗及
泉州堺の茶人
津田宗達の子
信長秀吉に仕ふ
利休と名を齊す
天正廿年歿

千宗易
號は利休
天正十九年自刃
年七十一

本山
山吹の寺殿の格

特別に招請された。彼れは云つてゐる。
正月三日寅刻(午前四時)ヨリ御城ニ罷出候時御門外ニテ宗及御
取合ニテ宗易ニ始テ懸御目候也サソフロヘバ大名小名カチ乗
物ニテ出頭ノ體ヲビタ、シキ様子也
彼れは此の記念の日に於いて、始めて故老の名茶人天王寺屋宗
及の紹介に依つて、斯道の大本山千利休宗易に逢つた。さて見る
ほどに、數の大名小名が或は歩行、或は乗物で、後から〜と出頭す
る、其の體の賑はしさ、夥しさ。
彼れは先づ五人の堺衆と共に廣間に畏つて居ると、そこへ石田
三成が出て來て、宗湛一人だけを内に連れて行つて、一通り座敷の
飾附を見せた。さて廣間に歸つてから、進物を献上し、それから堺
衆五人と相連れ立つて、再び前の立派な飾附を見て居ると、後から
秀吉が來て、大聲に尋ねた。

彼れが傍若無人
の率直さ無邪氣
さが、躍如とし
て現はれてゐ
る。

「筑紫ノ坊主ドレゾ」ト御尋被成候へバ是ニテ候ト宗及御申ニ候
被仰出ニハノコリノ者ハノケテ筑紫ノ坊主一人ニ能ミセヨト
ノ御諛ニ候
「九州の坊主はどいつだ？」と御尋ねなされると、此の者で御座りま
すると、宗及が申上げる。すると、餘の者は退かせて九州の坊主一
人によつて見せろ。」と御諛がある。堺衆が皆縁に出る。そのあと
で宗湛一人よく拜して、後に御茶の席に連つたといふのである。
「筑紫ノ坊主ドレゾ」。「残りノ者ハノケテ筑紫ノ坊主一人ニヨク見
セヨ」は、必ず秀吉の詞そのままの寫してあらうが、彼れが傍若無人
の率直さ無邪氣さが、躍如として現はれて居る。そして其の無造
作加減には云ふにいはれぬ一種の愛嬌と威力とがこもつて居て、
退けられた者をも腹立たせず、同時に大事に扱はれた者には、知己
の感に打たれて命をも惜まず捧げさせるといふ趣がある。

山岡對馬守

山岡宗無

千利休に學ぶ

秀吉に仕へ、宗

易、宗久、宗及

の三茶人と名を

齊うす

慶長十八年歿

年七十

宗室

裏千家の祖

宗且の第三子

加州侯に仕ふ

元祿十年歿

同じ年の二月二十五日、大阪城山里での「御會」に、宗湛は山岡對馬守と唯だ二人招かれた。そして關白様が御出であつて、

「ヲレガ手前ニテノマウカ。」

と仰しやつて、團爐裏によつて御茶を立て、もてなされた。と書いて居る。

同じ年の六月十九日の朝、これは舞臺が替つて、筑紫箱崎の陣所である。招かれたのは宗湛に宗室の唯だ二人。御氣に入りの茶人だけのホンの唯だ二人。ほのく明けに參候すると、數寄屋は縁なしの三疊敷。

「參り候へバ内ヨリ關白様障子御アケナサレテハイレヤト御コエタカニ御詫候也イマダクラクシテ座敷ノ内モ不見分……」

天下の英雄豐太閤が一個の商人茶人をもてなさんが爲めに、夜中から支度をして、三疊の數寄屋の内に、魂をひそめて、道友を待ち受

露地

關白の無上位も無かつたであらう。

けて居るのである。露地のかすかな足音を聞きつけると、靜かに立つて障子を明けて「入れや！」と聲高く呼ぶ。此の時の彼れの心には、その爲めに遙々とこゝまで出かけて來た朝鮮征伐も無かつたであらう。關白の無上位もなかつたであらう。而して天地間に唯だ吾汝の三人、迎へる吾と迎へらるゝ二人とがあるのみとなつて、



神屋宗湛

しとやかに起つて、サラリと明ける。そして「はひれや！」とは呼んだのであらう。吾等は彼れが豪放な傍若無人な態度の中に、一種の幽邃清白な魂を認めぬわけには行かぬ。

同じ年の六月には、秀吉自ら宗及の家の茶會に臨んだ。そして關白手づから花を活けた。一同がどつと感ずる。其の後袴など

りや存心

取つて、くつろいで、

「一折センツカト御誼ニテ」

「連歌を一くさりやらうッか？」と云つて、自ら

「しほがまの濱邊涼しき窓の前」

と發句する。やがて、つゞきの中に、また自ら

「博多町幾千代までやつゝのらん」

といふ一句を吟じ出だすと、一同が感嘆して、此の御句を博多の者

どもに聞かせずにおかれませうや。などいふと、

「上様御キゲンヨキナリ」

天下の關白秀吉、子供のやうにニコ／＼ホク／＼として歸つて

行く。

天正十五年の十月一日には、北野に大茶會が催されるので、關白

京着

から、九州で唯だ一人といふ、わざ／＼の招きがあつた。宗湛は手
放し難き用事に離れて、すぐ様上洛の途についたが、風波の爲めに
妨げられて、八日にやうやく京着した。即日關白に對面すると、御
誼には、

「カワイヤヲソク上リタルヨナ ヤガテ茶ヲノマセウゾヨト被

成御意候 忝ト申上也」

「かはいさうに、間に合はなかつたな。すぐに茶を立て、飲ませう
ぞ。」などは、何といふ隔意のない、そして情のうつた言葉であらう。
思ふに彼れの此の心、此の詞が、彼れをしてあれまでも早く天下を
取らしめたのであらう。

同じ年の十月二十一日の晝、彼れは宗及と同伴して關白に伺候
した。秀吉は

「食ハ何方ニテクイ候カ」

「飯は何處かで食つて來たか。」と尋ねる。「宗及の家ですまして参りまして御座ります。」と答へると、

「サテハ茶バカリノマセウヨ」

と云つて、それから手づから花瓶を出し、薄板をそへて、床に置き、

「博多ノ者ニ花ヲ入レサセウゾト御申候イレズハ筑紫ニハヤルマイゾト御詫ソロ」

「博多の坊主に花を活けさせうぞ。」「活けずは九州へは歸さんぞ。」諧謔が實に面白い。彼れが此の人扱ひ振、もう已に一種の立派な藝術である。

天正二十年十月晦日。秀吉は親しく宗湛が家の茶會に臨んだ。殊の外機嫌よく、いろ／＼冗談などをいふ。そして「此の一軸に床が調和せぬ。惜しいことだ。床の飾付を替へるがよい。」といひ、そして

皮肉の諧謔で、
上機嫌にとツと
笑ふ。

此ヤウナル指南ハ宗易モ宗及モ云テハキカセマジイゾト 御意也 忝ト申上候也。

「かういふ指南は利休にも宗及にも出來まいわ。アッハッハ……と、皮肉の諧謔で、上機嫌にとツと笑ふ。そして歸る時に、宗湛が見送つて、謹んで乗物の側に畏ると、さばけた調子で、國中の様子などを尋ねて、

銀子ヲ何ホドナリトモ申上次第可被成下御借候間ナゴヤニテモ商仕候ヘトノ御詫ナリ

「金は幾らでも、望み次第貸してやらうほどに、名護屋の方でも早速商賣をするがよい。」まづ趣味の一致融和があつて、最後に生活の保障、事業慾の鼓吹、而して國運興隆に對する協力の同情ある相談である。まゐらざるを得ない。

秀吉はその茶座敷の窓の障子に、自分の歌を自筆で書いて悦ん

でみたことなどもある。それは
 夕ざれに誰そやすらに言とふは
 窓のあたりの山おろしの風
 といふので、その下書を宗湛が拜領し、表装して、恭しく床に掛けて
 おくと、關白殿下ホク〜と悦んで居る。子供のやうに無邪氣で
 ある。そして天地と共に大きいものである。

不用意に現はれ
 た彼れの聲であ
 り、神が作つた
 彼れの姿に最も
 近い彼れの肖像
 である。

吾々は『宗湛日記』に現はれた豊太閤を見て、實に彼れを床しむの
 情に堪へぬ。吾々は此の日記の太閤を見て、あらゆる歴史の太閤
 よりも生きて居り、愛らしくあり、のみならず或意味では偉大であ
 るやうにも思ふ。要するに『宗湛日記』は太閤の活きた心そのまゝ
 の記録であり、不用意に現はれた彼れの聲であり、神が作つた彼れ
 の姿に最も近い彼れの肖像である。

三 中宮寺の観音

和 辻 哲 郎

和辻哲郎
 文學者
 京都大學教授
 兵庫の人
 明治二十二年生

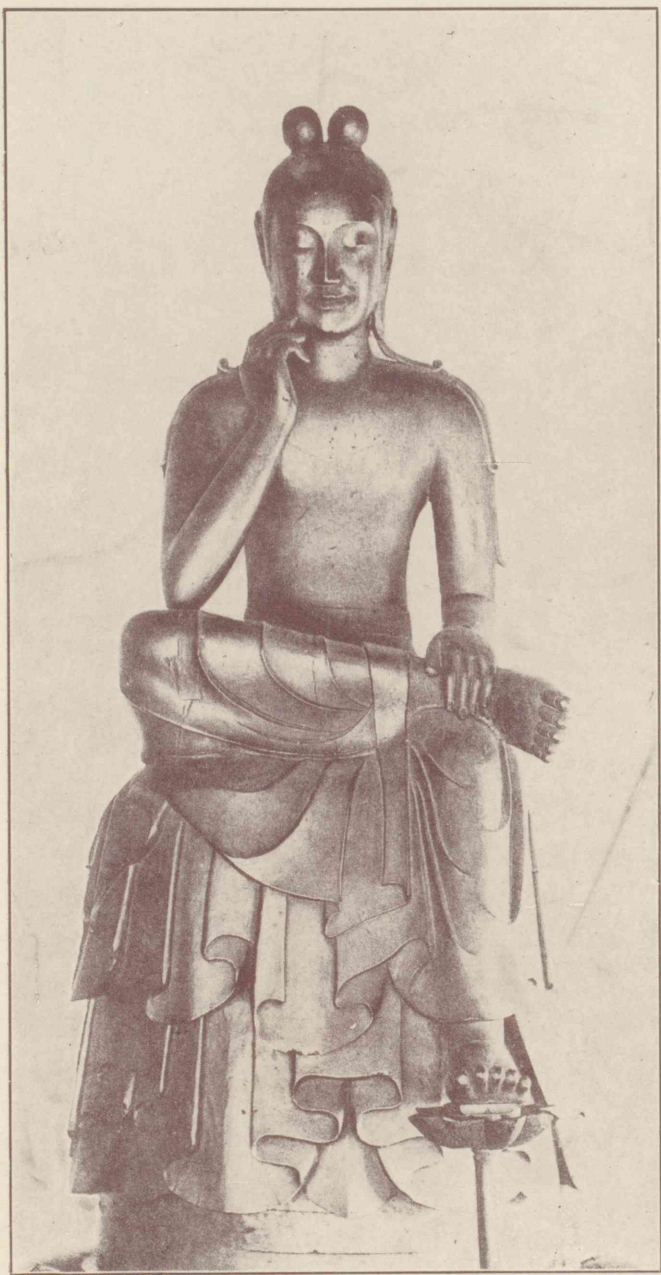
中宮寺へ行く。寺といふよりは庵室と云つた方が似つかはし
 いやうな小ぢんまりとした建物で、又尼寺らしい優しい心持もど
 ことなく感ぜられる。ちやうど本堂の修繕中で、観音様は厨子か
 ら出して、庫裏の奥座敷に移座させてあつた。我々は次ぎの室に、
 お客様らしく座蒲團の上に坐つて、隔ての襖をあけて貰つた。い
 かにも、お目にかゝるといふ心地であつた。

懐かしいわが聖女は、六疊間の中央に腰掛を置いて、靜かに腰を
 かけてゐる。右手の障子で柔らげられた光線を、軽く半面にうけ
 ながら、彼女は神々しい程に優しい、魂のほゝゑみを浮かべて居る。
 それはもう彫刻でも推古佛でもなかつた。たゞ我々の心からの

木とは思へぬ流動的な感じで、微細な面の凹凸を實に鋭敏に生かしてゐる。

跪拜に價する、さうして又其の跪拜に生きくゝと答へてくれる、一つの生きた、貴い、力強い、慈悲そのものの姿であつた。我々はしみじみとした個人的な親しみを感じながら、透明な愛着の心で、その顔を見まもつた。

あの肌の黒いつやは、實に不思議である。ねばり強いやうな、木とは思へぬ流動的な感じで、微細な面の凹凸を實に鋭敏に生かしてゐる。殊に顔の表情の細かさ、柔かさは、微妙な肉づけの注意が、この黒いつやの助けをかりて、始めて完全に現はし得たものと思はれる。あのうツとりと閉ぢた眼に、しみくゝと優しい愛の涙が、實際に光つてゐるやうに見え、あの微かにほゝゑんだ唇のあたり、この瞬間に閃いて出た愛の表情が、實際に動いて感ぜられるのは、確かにあのつやのお蔭であらう。あの頬の優しい美しさも、その頬に指先をつけた手の、引きつけられる様な形によさも、腕から



音觀輪意如寺宮中

そこには慈悲と
悲哀の盃がなみ
なみと充たさ
れて、それをう
れしく悲しく飲
み干す心があつ
た。

Maria

人間心奥の慈悲
の願望が、その
求める所を人間
の形に結晶せし
めたものである

肩にかけての清らかな柔味も、あのつやを除いては考へられない。我々はたゞうツとりとして眺めた。心の奥では、しめやかに、静かに、とめどもなく涙が流れた。そこには慈悲と悲哀の盃がなみなみと充たされて、それをうれしく悲しく飲み干す心があつた。誠に至純な美しさで、又美しいとのみでは言ひ盡くせない神聖な美しさであつた。

私は聖女と呼んだ。観音といふ言葉よりも、その方がふさはしいと思つたからである。しかしこれは聖母ではない。母であると共に處女であるマリアの美しさには、母の慈愛と、處女の清らかさとの結合が、女を淨化し透明にした趣があるが、しかしわが聖女は慈悲の權化である。人間心奥の慈悲の願望が、その求める所を人間の形に結晶せしめたものである。

私の知識の乏しさは、却つて容易に結論をつかませる。凡そ愛

當時の日本人の
心情を反映す
る。

の表現として、この像は世界の藝術の中に、比類のない獨得のものではないか。これよりも力強いもの、威嚴のあるもの、意味の深いもの、或は烈しい陶醉を現はすもの、情熱を現はすもの、それは世界に稀れどもあるまい。しかしこの純粹な愛と悲みとの標號は、その曇りのない專念の故に、その徹底した柔かさの故に、恐らく唯一な味はひを持つ。その甘美な牧歌的な、哀愁のしみ通つた心持が、若し當時の日本人の心情を反映するならば、この像は又日本の特質の表現である。古くは古事記の歌から、新しくは歌舞伎、淨瑠璃の文學まで、物のあはれとしめやかな愛情とを核心とする日本人の藝術は、既にこゝにその最も優れた、最も明らかな代表者を持つてゐるのである。浮世繪の人を陶醉させる柔かさ、日本音曲の心をとろかす悲哀も、その根強い中心の動向は、あの觀音に現はされた願望の一つの流れに過ぎなからう。法然、親鸞の宗教も、柔弱と

いはれる平安朝の小説も、一つとしてあの願望と、それから流れ出る優しい心情とを基調としないものはない。

あの悲しく貴い半跏の觀音像は、かく見れば、我々の文化の出發點である。最も古いといはれる古事記の歌も、時代から云つて、この像よりさまで古いものではない。もし上宮太子の文化が凝つてこの像となつたとすれば、此の像は太子その人の深いしめやかな慈愛の現はれたもので、従つて太子は我が文化の出發點を立派に藝術の上に見せた最初の偉人であるとも云はれるであらう。太子の手に成つた日本最初の成文法なる十七條憲法が極度に人道的であるのも、亦偶然ではないのである。

が、これらの最初の事象を生み出だすに至つた母胎は、我が國の優しい自然であらう。愛らしい、親しみやすい、優雅な、その癖、いづこの自然とも同じく底知れぬ神祕を持つた我が島國の自然は、人

しめやかな自然との同化、分化した官能の陶醉、飄逸な心の法悦。

間の姿に現はせば、あの観音となる外はない。自然に酔ふ甘美な心持は日本文化に貫通して流れてゐる著しい特長であるが、その根はあの観音と共通に、畢竟我が國土の自然自身から生ひ出でてゐるのである。葉末の露の美しさをも遁さずに鋭く感受する繊細な自然の愛や、一笠一杖に身を托して、自然に融け入つて行くしめやかな自然との同化や、その分化した官能の陶醉や、飄逸な心の法悦やは、一見この観音と甚だしく異なるやうにも思へる。しかしその異なるのは、たゞ注意の方向の相違で、捕へるところの對象にこそ差別はあれ、捕へんとする心情には、極めて近く相似たるものがある。要するに、母なるこの大地の特殊な美しさが、その胎から生れ出でた子孫に同じ美しさを賦與したので、我が國文化の考察は、結局、我が國自然の考察に歸つて行かなくてはならぬのである。

〔古寺巡禮〕

四 五千石

大名罷出でたるは、隠れもない大名。かやうにくわは申せども、つるゝ下人な只一人。その一人の下人めが、某に暇をも請はず、何方へやらおりそへてござる。聞けば、夜前歸りたる様子でござる。かれが私宅へ立ち越え、折檻の加へると存ずる。程なら彼れが私宅はこれにござる。某が聲で案内を請うてござるならば、定めて留守を使ふてござらう。作り聲を致し、喚び出だそと存ずる。ものも、お案内。冠者やら奇特や。表に案内がある。お案内、どなたでござる。大退り居ろ。冠はあッ。大おのれは、主の聲を聞き紛ふならば、不奉公といふものではあるまいか。その上某に暇をも請はず、何方へ遊山で候ぞ。冠いやはや、一人使はされます冠者の

そへるり夫れと

物の言

過言は申せども

ふん、京うち参
りをすれば、主
に暇を請はぬ法
でおりそうか。

儀でござれば、御暇と申したりとも、下されまいと存じ、かそうて京
うち参りを致してござる。太ふん、京うち参りをすれば、主に暇を
請はぬ法でおりそうか。え、それに待ち居ろ。やれ扱憎い奴でござ
る。只今手打にも致さうやうに存ずれども、京うち参りと申す
れば、都の様子も承りたう存ずる。まづ此度は差置ませう。や
い、其處な者、ずつと是れへ寄れ。問ふ事がある。冠はあッ。太扱
此度折檻の加へうずれども、重ねて折檻の加へうずる。都の様子
は何と。冠いやはや、天下治まり、彼方の花見、此方の遊山とあり、此
處彼處にひら幕打たせられ、謠ひ、舞ひ、酒もり、舞ひ遊ばさること
夥しい事てござりまする。太ふん、さうあらうずる。それにつけ、
別に珍らしき事はなかつたか。冠いや、謠を習うて参つてござり
まする。太それは何と思うて習うて來たぞ。冠いやはや、殿様は
お大名の事てござりますれば、御一門の参會にも、上座をつめさし

やれまする。すは亂舞也なりますると、下座へ下らしやりまする
のが見づらう存じて、教へませうと存じて、習うて参つてござりま
する。太はて扱、一段ういやつぢや。確と覺えて居るか。冠なが
なか覺えて居りまする。太さらば謠へ。聞かう。床几おくせい
く。冠はあッ。太して、囃子物を呼びに遣らうか。冠いや、身ども
が心拍子でうたひませう。太一段のことであらう。急いでうた
へ。冠二千石の松にこそ、千歳を祝ふのちまでも、その名は朽ちせ
ざりけれ、く。扱もく、一段の御機嫌に申し合はせたることか
な。太退り居ろ。その謠は、いはれを知つてうたふか。知らいで
うたふか。冠え、何とござるも存ぜぬ。太いや、知らぬといふを討
つて捨つればいかゞ。いはれを語り、その後討つて捨てう。これ
へつツと寄りをれ。冠はあッ。大語り、扱も某が親の親は祖父よな。
その親はひおほぢよな。とつとのあなたの代のことなるに、安倍

勢を以て我陰に拒み諷するなり

その大將な、八幡殿にてありしよな。攻めも攻め、耐へも耐へたる、前九年後三年。

貞任は、奥州衣川にて城郭を構へ、盛昌我意に任せらるゝ間、都よりも討手の大將下さるゝ。その大將な、八幡殿にてありしよな。攻めも攻め、耐へも耐へたる。前九年後三年、合はせて十二年三月といふものを攻めらるゝ。ある折に、御大將に御酒宴の始まりし。先祖のおほぢ、お酌に参り、大將たぶくゝと受け、祝言一つとありしとき、畏つて候とて、鎧の引合より、扇抜き出だし、銚子の長柄をたうたうとうち、二千石の松にこそ、千歳をいはふ後までも、その名は朽ちせざりけれと、おし返し三返うたふ。大將なのめに思召し、三盃酌んでほし給ふ。程なう敵を平げて、天下一統の御代を爲したまふも、ひとへに謠のゆゑなりとて、かやうなる御謠をば、乾の隅に壇の築き、石の唐櫃きつてすゑ、一つうたうてどうと入れ、二つうたうてどうと入れ、石の唐櫃のふたの、ぶつとすゑ、どうと入れ、七重に注連をはり、南無謠の大明神と額を打つて崇むる謠をば、何ぞやお

よう似ましてござる。

のれめが、何時の間にか盗み取り、謠うた事は曲事。」冠いや、都に流りまする。」大何、洛中まで謠ひ廣げ居つた事。いよゝゝおのれは憎い奴の。それへおなりそへ。やれさて、只今討つて捨てうと云ふのに、ほゆるは、國許に残し置いたる妻子どもに、名残が惜しいか。銅本鋒先に申分があるか、申せ。その後討つて捨てう。」冠いやは、やお太刀に御難もござりませず、妻子どもに名残も惜しうござらぬが、殿様の只今、直れ、打つて捨てうとおしやられまするお手許は、おほぢご様のお前にて、御茶の給仕をいたしたる折に、疊の縁に蹴躓き、茶碗を投げてござれば、さても無躰の奴のとあつて、尺八をおつ取り直し、打擲なされたるお手許と、今殿様のおのれ討つて捨てうと仰しやるゝ、お手許があゝ、よう似ましてござる。」大何といふぞ。親ぢや者の手許と、某が手許と、似たといふか。」冠あゝ、よう似ました。」太やい、汝討つて捨てうと思へども、討つ太刀も弱る。

一色、一品、一種、一式

よう似さつしや
れましてござ
る。

その儘でござり
ます。

今日の前に見る
やうにござる。

もはや許すぞ。冠それは誠でござりまするか。大誠ぢや。冠眞
實でござるか。大何しに偽をいはうぞ。乃ち太刀も鞘に收むる
ぞ。冠その如くに御心の早う直らしやれまする所は、よう似さつ
しやれましてござる。大何ぢや、よう似た。冠なかく。大汝を
年月使へども、何を一色もやらぬ。これは重代なれども、其方に取
らするぞ。冠かやうに物を下さるゝ御手許は其の儘でござる。
大何ぢや、似たといふか。冠左様でござる。大さういふ者に何が
惜しからうぞ。これは業よしなれども、これも汝に取らするぞ。
冠此の様に重ねくゝ下さるゝ御手許は生寫してござる。大かう
行く姿は。冠その儘でござる。大又戻る姿は。冠今日の前に見
るやうにござる。大餘り似たくゝとな云ひそ。昔が思ひ出され
て悲しいよ。やゝ、大名とあらうずる者が、斯様に歎くところでは
あるまい。いざ、めでたう笑うていのず。冠是れは一段でござり

ませう。大これへつツと寄れ。まだよれ。わッはッは。大

(『狂言記』)

五 我が名の徳

何心なく書かれ
た文章の中に、
自然に現はれた
教訓。

Shakespeare
(1564-1616)
英國の大戯曲家
詩人

凡そ教訓の爲めに書かれた教訓は、あまり有難いものではない。
味噌の味噌くさは最上の味噌にあらずともいふ。教訓の教訓
くさいのも同じ事で、何心なく書かれた文章の中に、自然に現はれ
た教訓の方が、寧ろ深く、そして自然に人を教へるであらう。また
押賣の厭味のないだけ、好い感化を及ぼす事にもなるであらう。
此の點から見て、イギリスの文學の中では、シェイクスピアの劇
詩が、最も多く、かういふ種類の教訓を含んで居るといはれるが、我
が國の文學の中で、その對を求めると、一部の作としては、『源氏物語』
が第一で、そして同種一群の作では、謠曲が第一であらう。そんな

意味の教訓を與へるものとして、平生考へて居る謠曲の文句の一つを拾つて、説明を加へて見たいと思ふのである。

それは「山姥」の中の一節で、山姥の詞に、
「我れ國々の山めぐり、今日しも爰に來たる事は、我が名の徳を

聞かん爲めなり。謠ひ給ひてさりとは、我が妄執を晴らし給へ。」

とある、此の文句である。「山姥」

は世阿彌元清の作であるが、幽玄宏遠なる禪の哲理を含んで

居るところから、古來一休禪師の作と稱へられて來たものである。此處までの荒筋は、都に百魔山姥といふ舞女があつて、山姥の山廻りする曲舞を巧みにした。此の女が或る時善光寺詣を思ひ立つ



山姥 (赤鶴作能面)

世阿彌元清
能作家
結崎氏、觀阿彌
の子
康正元年歿
年八十一

我が名の徳を聞く。

て、越後越中の國境なる境川からあげろの山といふにさしかゝると、まだ早い日が俄に暗くなつて來た。驚いて居ると、恐ろしき鬼女が、「なうく」と呼びかけつゝ、現はれて、わが庵で一夜を明かせといふ。そして御身は山姥の山めぐりを曲舞に作つて舞ふ高名の人ではないか。われは御身に曲舞に作られ舞はれて居る其の當人の山姥である。今日こゝに來たのは、御身から我が名の徳を聞きたい爲めである。我が持前の本性の現はれを見たい爲めである。どうぞ夜もすがら歌ひつ舞ひつして、我れ自身の何たるかを見せて下され、そして我が徳聞きたさ、本性見たさの深き執念を晴らして下されと、かういふのである。

面白いではないか。此の山姥は自分の本質を他人に於ける現はれに見ようとして居るのである。自分が自分でありながら、客觀化された自分の姿を見ねば安心が出来ぬのに苦しんで居るの

生れながらに備へて居る其の本具の性質能力を練りひろげ、展ばし現はす、それが人間の一生心はないか。

である。自分が自性自徳を具へながら、それが他人他物の客觀に現はれたのを見ねば安心が出来ぬといふ、誠に可笑しな話であるが、しかしながら是れが人性の已み難き自然で、また此處が人生の面白いところであらう。人間といふ者は自分を知りたがるものである。自分を知らずには居られぬものである。他人に於いて、外物に於いて、常に自分を見よう、聞かう、知らうとして居るものである。論より證據、我々は、自分が立派な本尊でありながら、假の姿の寫眞を撮つて、その影法師の寫眞の出來あがるのを待ち遠がるではないか。自分が眞性本質の全部を備へて居りながら、其の一部分が歪形に噂される他人の噂に聞き耳を立てるではないか。また自分が生れながらに備へて居る其の本具の性質能力を練りひろげ、展ばし現はす、それが人間の一生ではないか。大昔希臘のアポロの神殿には「汝自らを知れ」といふ額をかけてあつたといふ。

Socrates (469-399 B.C.)
ギリシヤの哲學者

教育は新しいものを人に注ぎ込むのではなく、人の本來具へてゐる能力を引き出す事である。

本來の面目

蘇東坡

宋代の文章家

詩人

名は軾字は子瞻 (1036-1101)

Emerson (1803-1883)

ソクラテスは、教育は、新しいものを人に注ぎ込むのではなく、人の本來具へてゐた能力を引き出す事、譬へば産婆が赤坊を取り上げるやうなものであると云つて、自分の問答式の教育法を産婆術と名づけた。禪宗では本來の面目を知る事を「悟」と云つて居る。宋の蘇東坡は「廬山烟雨浙江潮、未到千般恨、不消到得還來無別事、廬山烟雨浙江潮」といつた。行つて見ぬ中は、無闇に珍らしきもの、奇異なるものと想像して床しがり、見ぬ事を恨めしく思つたのが、行つて見れば何の別事はない、廬山はやはり煙雨、浙江はやはり潮であつたといふのであらう。アメリカの名高い思想家のエマースンは、その藝術論の中で、旅行家は、自分の知らぬ或る物を見知る積りで出かけるが、實は自分が本來持つて居るものを説明して貰ふ爲めに百里千里と出掛けるのだと云つて居る。其の中に、あちこちを遍歴して、最後に羅馬に來る。どんな新しい、愉快な、

Raphael (1483-1520)
 イタリアの畫家
 Michael Angelo (1475-1564)
 イタリアの畫家
 彫刻家
 Titian (1477-1575)
 イタリアの畫家
 Leonardo da Vinci (1452-1519)
 イタリアの畫家
 Boston 米國東北の都會
 Vatican ローマ法王宮殿
 Milan イタリア北部の都會
 唐白ふみの堂々めぐり。

不思議な、目ざましい物を見ることかと思ふと、何の皆お互の知り抜いてみた平明な君と僕とである。……ラファエルの繪だ、ミカエル・アンジェロだ、チチアんだ、レオナルド、ダヴィンチだ。どんなに珍らしいかと思ふと、何のみんな古馴染で、何だ、この古もぐらもちめ！ 一つの間に地の中をもぐつて此處に來て居るのだ！と言ひたい位旅だつ時に生れ故郷のボストンに残して來た筈のものが、いつの間にか、ワチカンに、ミランに、巴里にと、後追ひして、やつて來て、新奇を求めた折角の長路の旅を唐白ふみの堂々めぐりにして了ふのだ。

など云つて居る。面白いではないか。「慚愧」といふ語は、佛教家の一解釋によると、慚は自己の邪心悪行に恥づる事、愧は他人の邪惡に恥づる事だと云ふことであるが、他に恥づるといふのは、畢竟他人の悪行に自分の影を見出だして恥づるのであらう。吾々が一

腦裏心眼の裡に
 巻き藏められた
 一大風光を開展
 し、説明して貰
 ふ爲めに、千里
 萬里の遙かな旅
 をするのである。
 我が姿をつくり
 なる他人の姿に

生涯の見るもの聞くもの、考へ様によつては、悉く自分の影である。熊坂長範、石川五右衛門は、自分の心の隅に潛むさもしい心を客觀化し擴大化してマザ／＼と見せた影法師ではないか。畠山重忠、加藤清正は、同じく自分の心の中に潛む武士魂を、思ふさま長養して客觀化した我が姿ではないか。かやうにして、我々は「我」といふもの、本來具有した我が性質といふものをば、他の人他の物に説明して貰ひつゝ、一生を送るのである。我が本體を他人他物に見出だしては、泣きつゝ、笑ひつゝ、悦びつゝ、恐れをのゝきつゝ、今日より明日へ、幼きより老いへと進んで行くのである。腦裏心眼の裡に巻き藏められた一大風光を開展し、説明して貰ふ爲めに、千里萬里の遙かな旅をするのである。そして我が姿そっくりなる他人の姿に出逢つた時に、わが本來の面目を立派に説明して貰つた時に、彼我の障壁の一時に打破せられたのを感じて、破顔微笑するので

逢つた時に、わが本来の面目を立派に説明して貰つた時に、彼私の障壁の一時に打破せられたのを感じて、破顔微笑するのである。

兼好法師

吉野朝時代の歌人、文章家
姓は下部、吉田
正平五年歿
年六十八

ある。この我が姿の現はれを求め、我が本性の説明を求め、何人にも存する人間本来の深い、悩み求めであつて、山姥が「山めぐりの妄執」は、まさしく、此の人間性の藝術化された説明ではなからうか。私はかやうな事を考へて、此の山姥の一句に甚深の教訓を見出だして居るのである。

〔雲來去〕

六 花はさかりに

兼好法師

一 花はさかりに

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ、見所多けれ。歌のことばがきにも、花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ

萬の事も、はじめ終はりこそをかしけれ。

月花をばさのみ目にて見るものかは。

よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。

とも、さはることありてまからでなども書けるは、花を見てといへるに劣れることかは。花の散り、月のかたぶくをしたふならひは、さることなれど、殊にかたくななる人ぞ、この枝かの枝散りにけり、今は見所なしなどはいふめる。萬の事も、はじめ終はりこそをかしけれ。望月の隈なきを千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴、白檮などの濡れたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都戀しうおほゆれ。すべて、月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜はねやのうちながらも、思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。

花のもとにはねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては、大きな枝こゝろなく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて跡つけなど、よろづのものよそながら見ることをなし。

二 さしたる事なくて

さしたることなくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなば、とく歸るべし。久しくゐたる、いとむづかし。人と對ひたれば、ことば多く、身もくたびれ、心も靜かならず、よろづの事ははりて時をうつす。互のため益なし。いとほしげにいはむもわろし、心づきなき事あらむ折は、なか／＼その由をもいひてむ。同じ心に對はまほしく思はむ人の、つれ／＼にて、今しばし、けふは心靜かに、などいはむは、この限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰れもあるべき事なり。その事となきに、

阮籍

晉の人、竹林七賢の一人。心にかなはぬ人來れば白眼を以つて迎へ、心にかなふ人來れば青眼を以て迎へたりといふ。

人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も、久しく聞こえさせねばなどばかりいひおこせたる、いとうれし。

三 よろづの事は

よろづの事はたのむべからず。愚かなる人は深く物をたのむゆゑに恨み怒ることあり。勢ありとてたのむべからず。こはきもの先づ亡ぶ。財多しとて頼むべからず。時の間に失ひ易し。才ありとて頼むべからず。孔子も時にあはず。徳ありとて頼むべからず。顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず。誅を受くること速かなり。奴従へりとして頼むべからず。そむき走る事あり。人の志をも頼むべからず。必ず變ず。約をも頼むべからず。信あることすくなし。身をも人をも頼まざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。

〔徒然草〕

西田幾多郎

哲學者
文學博士
京都帝國大學名譽教授
石川縣の人
明治元年生

知と愛とは本来同一の精神作用である。一言にしていへば主客合一の作用である。

物の真相を知るといふのは、主觀的のものを消磨し盡くして純客觀に一致した時に始めてこれをよくするのである。

七 知 と 愛

西田幾多郎

知と愛とは普通には全然相異なつた精神作用であると考へられて居る。しかし余は此の二つの精神作用は、決して別種のものではなく、本来同一の精神作用であると考へる。然らば如何なる精神作用であるか。一言にていへば、主客合一の作用である。我が物に一致する作用である。何故に知は主客合一であるか。我が物の真相を知るといふのは、自己の妄想臆斷、即ち所謂主觀的のものを消磨し盡くして物の真相に一致した時、即ち純客觀に一致した時、始めて之れを能くするのである。例へば、明月に薄黒い處のあるのは、兎が餅を搗いて居るのであるとか、地震は地下の大鯨が動くのであるとかいふのは、主觀的妄想である。然るに、我々

我々は客觀的にならばなるほど、益と能く物の真相を知ることが出来る。

我々が物を愛するといふのは、自己を捨て、他に一致するの謂ひである。自他合一、其の間に一點の隙間もなくして、始めて眞の愛情が起るのである。



西田幾多郎

は天文地質の學に於いて全然かゝる主觀的妄想を捨て、純客觀的なる自然法則に従つて考究し、爰に始めて此等の現象の真相に到達することが出来るのである。我々は客觀的になればなるほど、益、能く物の真相を知ることが出来る。數千年來の學問進歩の歴史は、我々人間が

主觀を棄て、客觀に従ひ來たつた道筋を示したものである。

次ぎに何故に愛は主客合一であるか。我々が物を愛するといふのは、自己を捨て、他に一致するの謂ひである。自他合一、其の間に一點の隙間もなくして、始めて眞の愛情が起るのである。我々が花を愛するのは、自分が花と一致するのである。月を愛す

物-包-行-物-取-決-り-の-時

我々が自己を棄て、無私となればなるほど、愛は大きくなり深くなる。

るのは月に一致するのである。親が子となり、子が親となり、此處に始めて親子の愛情が起るのである。親が子となるが故に、子の一利一害が己れの利害のやうに感ぜられ、子が親となるが故に、親の一喜一憂が己れの喜憂の如くに感ぜられるのである。我々が自己の私を棄て、純客觀的即ち無私となればなるほど、愛は大きくなり深くなる。親子、夫妻の愛より朋友の愛に進み、朋友の愛より人類の愛に進む。佛陀の愛は禽獸草木にまでも及んだのである。

眞の愛

斯くの如く、知と愛とは同一の精神作用である。物を知るには之れを愛せねばならず、物を愛するには之れを知らねばならぬ。數學者は自己を棄て、數理を愛し、數理その者と一致するが故に、能く數理を明らかにすることが出来るのである。美術家は能く自然を愛し、自然に一致し、自己を自然の中に没することによつて

愛は知の結果、知は愛の結果といふやうに、此の兩作用を分けて考へるのは未だ知と愛との眞相を得たものではない。知は愛、愛は知である。

始めて自然の眞を看破し得るのである。又一方より考へて見れば、我れは我が友を知るが故に、之れを愛するのである。境遇を同じうし、思想趣味を同じうし、相理解する事が愈、深ければ深い程、同情は益、濃かになる譯である。それ故、愛は知の結果、知は愛の結果といふやうに、此の兩作用を分けて考へるのは、未だ知と愛との眞相を得たものではない。知は愛、愛は知である。例へば、我々が自己の好む所に熱中する時は、殆んど無意識である。自己を忘れて、唯だ自己以上の不可思議が獨り堂々として働いて居る。此の時、唯だ自己以上、客もなく、眞の主客合一である。此の時、知即愛、愛即知である。數理の妙に心を奪はれ、寢食を忘れて之れに耽る時、我れは數理を知ると共に之れを愛しつゝあるのである。又我々が他人の喜憂に對して、全く自他の區別がなく、他人の感ずる所を直ちに自己に感じ、共に笑ひ共に泣く、此の時我れは他人を愛し、又之

賤が伏屋より煙のいとしげく立ち上るは、蚊遣ふすぶるにやと思ふに、大きな火桶に何にかあらむ、青やかなる木の葉をいと多くさし入れて、こなたかなたあふぎちらすは、いとあつかはしく、見る

暮山霞
山のははうつみは
てぬる夕暮のかす
みや鳥のねぐらな
るらん廣足

廣足筆蹟

目もいぶせく、急ぎ歩みすぎて見れば、やうく薄らぎゆくけぶりの杉の梢にたなびきたる霞おぼえてをかしきにかはほりさへ三つ二つ飛びかひたる、繪にも書かまほしき景色になむ。〔樞園文集〕

二 蟲の音

石川 依平

家なみしきたる都のすまひは、前裁もほどなけれど、萩すゝきなどはさすがに折知りがほなるを、あはれと見ぬたる夕つかたに、親しき人のもとより、昨日嵯峨野にもとめしなりとて、蟲どもあまた

石川依平
江戸時代の歌人
柳園と號す
遠江の人
安政六年歿
年六十九

籠に入れておこせたり。めづらかにて、とくわらはよびて放たせつゝ、なほながめをるに、もとよりのにやあらむ、いままゐりのにやあらむ、かつく、鳴きいでたる、いと興あり。月さしのほりては、まして音もすみゆくには、はるけき野べまでおもひやられて。〔柳園集〕

三 所感ありて記す

伴 蒿 蹊

凡そ世にある人、舊りたるを厭ひ、あらたなるを悦び、時世に靡くは習ひなるを、それが中に舊りたる事好む人もまじれるこそ、人の心の一方ならぬ程も見えて、をかしくなむ。あるさてしも、その舊りたるといふにも、又品あまたなる中に、大方は、茶の業を好むにつきて、古き器を好むなり。これには、千々の黄金を惜しまぬ人もあれど、詮とする所、富を競ふに似たれば、措きて言はず。あるは、古き錢、古き瓦など好むあり。古き兵具、ふるき佛を喜び、古き寺社を尋ぬるなどもをかし。又古き巻物の書畫、古き石摺など喜ぶは、殊に益あ

伴蒿蹊
江戸末期の國學者
名は資芳
號は閑田子
近江の人
文化三年歿
年七十四

入木道

八省院 朝堂院、八省、大極殿院ともいふ。其の中に大極殿あり

都府樓 九州太宰府の廳舎

義之 書道大家 姓は王 晉の右軍將軍 會稽内史

懷素 唐の高僧 書家

金岡

畫家 巨勢家の祖 清和陽成光孝字多醜 嗣の五朝に仕へ 大納言となる

常則 平安朝天曆頃の畫家

淵明 姓は陶 名を潛ともいふ 晉の詩人

るべし。およそ彼の錢や瓦のたぐひも、昔を探るに便ありて、八省院、都府樓などの瓦を得ては、延喜天曆の制度をも窺ひつべし。まいて義之、懷素が墨痕に依りては、己が筆意をも悟りぬべく、金岡、常則などの後素には、衣冠の制、殿閣の法、よろづ古代の姿を見るに足るもの

をや。されど誠に古を好むといふは、

學びを好むなり。書物と云ふは、

淵明の詩に、得^ル知^ル千載外、上^ラ頼^ル古人書といへるも是れなり。かの器ものや書畫なども、學びの餘りに好むとならば、やがて學びの助けとなるべし。さらでは好み得て全からず。例へば、身のくづを

あつたふしとていふに、
 まをすゝめていふに、
 筆の跡をみるに、
 古を好むといふは、

蹟筆 蹊蒿 ①

虞舜の椀。 大王の杖。

れたる人の、眼ばかりは他よりさやかかなり、耳のみは殊にさとしな
 どいはむがごとし。あるひは、此の病募りては、彼の虞舜の作れる
 椀を持ち大王の杖を衝きて、市中に食を乞ひけむ人のつらに落つ
 べからずや。たとひ孔子の手ならし給ひし器、身に觸れ給へる
 衣なりとも、なほ心を染め給へる六經には劣るべしとこそはから
 るれ。これらの論は今更なるやうなれど、過ぎし頃、ある人の古き
 を好むといふが、路のつらなる石碑石佛の類を見ありきて、昔を拂
 ひ水そゝぎて、紙もて摺りうつしなど、たま〜長の字を見ては延
 長かと疑ひ、寛の字に似たれば、寛平ならむと喜びしが、その人常に
 雪に螢を聚むることもせねば、こはいたづらなる隙ふたぎやと、心
 ひとつに打歎かれ侍りしに、今宵何となく古き器の物語する人あ
 りしついで、かの事ふと思ひ出でられ、戯れながらこれをしるして、
 常に語らふ若き人々にも見せばやとて、**なむ**名に負ふ夜ながら、月

の歌に代へ侍りつ。

文見ずはかひなからましいにしへを

このむてふなる名にはたつとも。

(閑田文章)

九山庵雜記

北村透谷

人間の心中に大文章あり筆を把り机に對する時に於いてより
も黙居冥坐する時に於いて燦爛たる光明を發する事多し。心中
の文章によりて心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中
の文章を装はんとするは文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の
士、往々にして文章を事とするを喜ばず、文字の賊とならんよりも
心中の文章に甘んじたればならむ。

北村透谷

名は門太郎

詩人

神奈川縣生

明治二十七年歿

年二十七

心中の文章によりて心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を装はんとするは、文字の賊なるべし。

或は狂ひしくなれり
或は寂定に歸せんか
或は猖狂、或は枯寂、猖狂には猖狂の苦味あり、
枯寂には枯寂の悲寥あり。



北村透谷

身心を放ちて冥然として天道に任せんか、身心を収めて凝然として寂定に歸せんか。或は猖狂、或は枯寂、猖狂には猖狂の苦味あり、枯寂には枯寂の悲寥あり。魚躍り、鳶舞ふを見れば、聊か心を無我の境に驅ることを得、雨そぼち風吹きさそふにあひては忽ち現身の我に還る。自然は我れを弄するに似て弄せざるを感得すれば、虚も無く實もなし。

Byron
英國の詩人
(1788—1834)

人の世に涙あるは原頭に水あるが如し。

猛き勇士の心を弱くするもの、情違ひ歡薄らぎたる間柄を緊め固むるもの、涙の外には求めがたし。人の世に涙あるは原頭に水あるが如し。世間もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば甚だしく悲しきことは跡を絶つに庶幾からんか。

閑雲野鶴を見て、別天地に逍遙するは詩人の至快なり。

閑雲野鶴を見て、別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海塵境を脱離して一身を挺出せんとするは人間の道にあらず。苦海塵境に清涼の氣を輸入するにあらざれば、詩人は一为天職をも帯びざる放蕩漢にして終はらんのみ。

Quayle
英國の文豪
(1793-1881)

大なる悔改はまた一個の大信仰なり。罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし、とはカーライルに聞くところなり。昨日の

非を知りて明日の是を期するは信仰に入るの要諦にして、罪人の必ずしも自殺せざるは是を以てなり。罪の重荷は忘れざるによりて忘るゝを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は即ち信仰の生涯なるか。

一〇 高名の發句



〔透谷全集〕

宗鑑

貞徳

宗因

手をついて歌申上ぐる蛙かな
月に柄をさしたらばよき團扇かな

和歌に師匠なき鶯と蛙かな
ねぶらせて養ひ立てよ花のあめ
やがて見よ棒くらはせん蕎麥の花
白露や無分別なるおきどころ

宗鑑 室町末期の俳人
山崎氏 天文二十二年歿
年八十九
貞徳 江戸初期の俳人
松永氏 承應二年歿
年八十三
宗因 江戸初期の俳人
談林の開祖
西山氏 天和二年歿
年七十八

ふる池や蛙飛びこむ水の音 はせを

芭蕉 江戸時代の俳聖

蕉風の開祖

松尾氏

伊賀の人

元禄七年歿

年五十一

鬼貫

江戸の俳人

上島氏

伊丹氏

元文三年歿

年七十八

五月雨をあつめてはやし最上川
荒海や佐渡に横たふ天の川

芭蕉

ぬる池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉筆蹟

芭蕉筆蹟

初時雨猿も小篋をほしげなり
静かさや岩にしみ入る蟬の聲
うき我れをさびしがらせよ閑古鳥
かけ橋や命をからむ蔦かつら
枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
塚も動け我が泣く聲は秋の風
旅に病みて夢は枯野をかけめぐる
行水の捨て所なし蟲の聲

鬼貫



其角木像

夕陽のさすがに寒し小六月

おにつら

其角

江戸の俳人

芭蕉の高弟

實井氏

寶永四年歿

年四十七

嵐雪

俳人

芭蕉の高弟

寶永四年歿

年五十四

許六

俳人

芭蕉の高弟

彦根藩士

森川氏

正徳五年歿

年六十

飛ぶ鮎の底に雲ゆく流れかな

夕陽のさすがに寒し小六月

鬼貫筆蹟

鬼貫筆蹟

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春
夕立やあらひわけたる土の色
明月や壘の上に松のかげ
此の木戸や鎖のさゝれて冬の月
元日や晴れて雀のものがたり
梅一輪一りん程のあたゝかさ
黄菊白菊その外の名はなくもがな
初霜や鐘樓の道の杳のあと
看經の間を朝顔の盛りかな

其角

嵐雪

許六

惟然坊
俳人(蕉門)
廣瀬氏
美濃の人

去來

俳人

芭蕉の高弟

向井氏

長崎の人

寶永元年歿

年五十四

燕村

俳人

谷口氏、又は與

謝氏を稱す

天明三年歿

年六十七

惟然坊

去來

燕村



像木雪嵐

一一 松島より平泉へ

時雨れけり走り入りけり晴れにけり
あれ夏の雲また雲のかさなれば
元日や家に譲りの太刀はかん
應々といへど叩くや雪の門
湖の水まさりけり五月雨
不二ひとつうづみ残して若葉かな
柳散り清水涸れ石處々
蕭條として石に日の入る枯野かな
化けさうな傘かす寺の時雨かな
閻王の口や牡丹を吐かんとす

松尾芭蕉

西湖

支那の浙江省

洞庭

支那の湖南省

浙江

支那浙江省に在

り、海潮の奇を

以て知らる。

庭西湖を恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里、浙江の潮をた
たふ。島々の數を盡くして、敬つものは天を指さし、伏すものは波
にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ、
右につらなる。おへるあり抱け



像木蕉芭尾松

るあり。兒孫を愛するがごとし。
松の緑こまやかに、枝葉沙風に吹
き撓めて、屈曲おのづからためた
るがごとし。其の氣色窅然とし
て美人の顔をよそほふ。千はや
ぶる神のむかし大山すみのなせ
るわざにや。造化の天工いづれ

山津見神(4ノ神)
大綿津見神(河の神)
科戸印(尾の神)

一一 松島より平泉へ

五九

雲居禪師
松島瑞巖寺の住
職
伊達政宗の歸依
僧

十二日
元祿二年五月

平泉
陸中西磐井郡
人跡稀に雉兔
藪蕘の往きか
ふ道そことも
わかず。

石の巻
陸前牡鹿郡の町
こがね花咲く
すめらぎの御代
榮えんと東なる
みちのく山にこ
がね花咲く
(萬葉集)

雄島が磯は地つゞきて海に出でたる島也。雲居禪師の別室の
跡、坐禪石などあり。はた松の木かげに世をいとふ人もまれく
見え侍りて落穂松かさなどうちけぶりたる草の庵じづかに住み
なし、いかなる人とは知られずながら先づなつかしく立ちよるほ
どに、月海にうつりて晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を
もとむれば、窓をひらき二階を作りて風雲の中に旅ねすることあ
やしきまで妙なる心地はせらるれ。兼報の手紙と云ふ水。
十二日、平泉へと志し、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて人
跡まれに雉兔藪蕘のゆきかふ道そこともわかず、終に道ふみたが
へて、石の巻と云ふみなとにいづ。こがね花咲くとよみてたてま
つりたる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地
をあらそひて、竈の煙たちつゞけたり。思ひかけず斯かるところ
にも來たれるかなと、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸く

袖のわたり
以下戸伊摩に至
るまでの地名皆
陸前に在り。

三代の榮耀一睡
の中。

秀衡
藤原氏

高館
衣川館ともいふ
義經の居館

和泉が城
泉三郎忠衡の居
館

清衡墓所 秀衡原

まどしき小家に一夜を明かして、明くれば又知らぬ道まよひ行く。
袖のわたり尾ぶちの牧まのの萱原
などよそめに見てはるかなる堤を
行き、こゝろぼそき長沼にそうて、戸
伊摩と云ふ處に一宿して平泉に至
る。其の間二十餘里ほどと覺ゆ。
三代の榮耀一睡の中にして、大門
の跡は一里こなたにあり。秀衡が
跡は田野に成りて、金雞山のみかた
ちを残す。先づ高館にのぼれば、北
上川南部よりながるゝ大河なり。
衣川は和泉が城をめぐりて高館の
下にて大河に落ち入る。康衡等が舊跡は衣が關を隔て、南部口



島 松

國破山河在、城
春草木深。
(杜甫)

經堂は三將の像
を残し、光堂は
三代の棺を納
め、三尊の佛を
安置す。

をさしかため、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の草むらとなる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと笠打ち敷きて時のうつろふまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと
かねて耳驚かしたる二堂開張す。經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面あらたにかこみて、藁を覆うて風雨をしのぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

さみだれの降り残してや光堂

〔奥の細道〕

一一 中尊寺を訪ふ

大正九年の七月の末の一日、私はまだ干あがらぬ草の露を踏みしだいて、久しい愛の中尊寺を訪ねた。金鷄山の麓にかゝると、そこに毛越寺の寺中の一つなる千手院といふのがある。案内人が尋ねる。

「此の御寺に秀衡公の木像がありますが、御覽になりますか。」

それは是非見せて貰はうと云つて、立ち寄つた。導かれて奥の間に行く。黒よごれによごれた室の奥の壇の上の黒くさびた厨子の戸を開くと、中に烏帽子直垂して中啓を持った立派な坐像がある。豊頬白面で、眉が長く、鼻下の髭の遠く離れて八の字を成した優雅な姿は、東奥の都人たる彼れの風懷をいかにも美しく現はして居る。彼れの顔が此の薄黒い室に白く輝いて居る如く、當年の彼れが風姿は、陰氣な土くさい奥州に花の如く月の如く明るく輝いたことであらう。一禮して厚く堂主に謝して立ち出でた。

中尊寺

まだ干あがらぬ
草の露を踏みし
だいて、久しい
愛の中尊寺を訪
ねた。

優雅な姿

風懷を美しく現
はしてゐる。
彼れが風姿は、
陰氣な土くさい
奥州に花の如く
月の如く明るく
輝いたことであ
らう。

少し行くと、同じ金鷄山の麓に「瓜割の清水」といふ名泉がある。非常につめたく、眞夏に瓜を漬けると龜裂が入るので、此の名を得たといふことである。一寸喉をうるほして又出かけた。少し行つて鐵道の踏切を越すと、大きい本道に出た。道を左に取つて、暫らくして櫻川といふ小さい流れを渡ると、やがて月見坂にかゝつて、それから中尊寺の領分に入るのである。

中尊寺は藤原氏初代の清衡の建立したものであるが、今の中尊寺に、清衡が建立當時の面影を其のまゝ留めて居る建物は一つもない。大體は建武の野火に焼かれて、辛うじて金色堂、經藏の二つをとゞめ得たが、經藏はもと二階建てであつたのが、上層が焼けたので、平屋造りに改められ、金色堂は鎌倉の親王將軍の世に、覆堂ふくどうによつてすつかり外面そとの黄金光を蔽はれ、明治になつて屋根を銅に葺きかへられて、綠青の冠、朽木の胴といふ不思議な外觀を備へるこ

清衡

陸奥押領使
藤原秀郷七世の
孫、國人御館と
稱す。

とになつた。それ故、今の中尊寺に遊んで創建當時の中尊寺を偲ばうと思ふ者は、まづあの、西南に塔山、鏡ヶ岳等の山々が聳えて居り、東北に北上川、衣川が流れて居る、其の中間の山裾に小さい丘陵が起伏しながらも、大體平地を成して居る廣い一廓があつて、そこに老木の大杉が群り立つて綠をこめて居る。其の丘の上、其の杉の森の間を縫つて、今の金色堂や經藏に見るやうな、優雅なさびた堂塔が四十餘宇、僧房が三百餘宇、美しく配置されて居る。そして其處に國守や士民の尊仰をあつめた千餘人の僧侶が、緋衣、紫衣、黄衣に光つて右往左往する。其處に讀經梵唄の聲が不斷に聞こえ、そこから鐘樓の鐘の梵音が、森を通ほして國中に鳴り響く、といふ光景を想像せねばならぬ。

あの形勝の丘の上に、天を摩する老杉に護られて、數百宇の立派な伽藍の並び立つた光景は、さぞ尊いものであつたであらう。國

歸命頂禮す。
禮讚を献げる。

文化の光を仰ぐ。

中尊寺は誠に闇の中に現じた光りであつた、地獄の中にあつた極樂の影であつた。

守が國帑を傾けて迎へ得た佛像と、高僧と、經卷とを其の中に齎もちいて、國守自ら其の前に歸命頂禮し、一切の士民が其のあとについて無條件の禮讚を献げた光景は、更に驚くべく尊いものであつたであらう。かくして猛獸、毒蛇に棲まれ、蝦夷に荒され、惡路王まじに蹂躪こられ、前九年、後三年の無慚な鐵火の洗禮を受けた古奥州が、都の文化を慕ふ國守の努力によつて、開闢以來始めて文化の光を仰いだのだ。そして其の光を仰ぐ初めに於いて、難有くも世界最大の宗教と最高の美術とに、同時に接することが出來たのだ。古奥州に取つて、中尊寺は誠に闇の中に現じた光りであつた、地獄の中にあつた極樂の影であつた。従つてこれを現はした鎮守府將軍は、軍事政事の統帥者であると共に、魂をも救ふ者として五十四郡の尊仰を集めたのである。

昔の中尊寺の中心は大金堂其の他の主要なる堂塔で、金色堂は

それらの間に介在するほんの附屬の一堂宇に過ぎなかつたに相違ない。けれども建立者の本心から



堂 色 金

る。彼等は其の遺骸を保護し、後世安樂を得んが爲めに、彌陀、觀音、

云ふと、彼等が私的の愛着から、第一に魂を吹き込んだのは金色堂で、建武の大火に此の建物のみが不思議に災厄を遁れたのも、三代の執念が蛇の如く付き纏つて猛火を拂ひしりぞけた爲めであらう。従つて彼等は此の一堂の爲めには、他の三百数十の堂塔伽藍を犠牲にすることを厭はなかつたであらう。金色堂は彼等の遺骸を納めんが爲めに建てられたものであ

四本の柱に七寶莊嚴の美を盡くして十二光佛を現はし、柱梁に螺鈿珠玉を鏤め四壁の内外に金箔を貼つて、堂の内外全部に金色を輝かした。

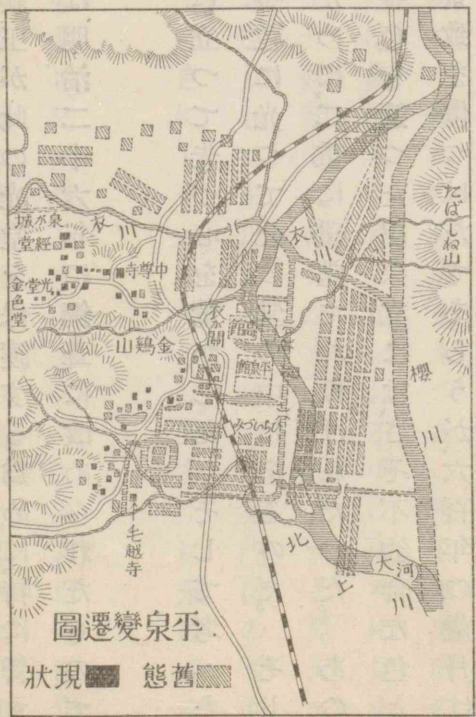
勢至の三尊と、六地藏と多聞持國の二天王とを此の堂に安置した。思ふに彼等の心は絶対理想の本尊佛と、六道能化の慈悲佛と、邪魔粉碎の威力佛との加護によつて、その遺骸の安全を期したのであらう。また金色堂と他の堂塔との位置を見ると、大金堂、經藏、大日堂、釋迦堂、千手堂、兩界堂、藥師堂等が、四方に並び立つて、真中なる金色堂を圍んで居る。思ふに彼等の心は、是等の尊い伽藍に圍繞され、三寶の加護を受けて、成佛の素願を達したいと思つたのであらう。四本の柱に七寶莊嚴の美を盡くして十二光佛を現はし、柱梁に螺鈿珠玉を鏤め四壁の内外に金箔を貼つて、堂の内外全部に金色を輝かしたのは、有形の現の身を、そのまま、黄金の極樂世界に置かうとしたのであらう。外は靈山の靈木の間に並び立つ諸々の堂塔に取りまかれ、内には黄金の堂の中に、絶対佛と、愛撫の佛と、破邪降魔の佛とを安置して、其の下に藤原氏三代の三鎮守府將軍、清

基衡
陸奥出羽押領使
清衡の子

秀衡
鎮守府將軍
陸奥守
文治三年歿

衡基衡、秀衡が木乃伊となつておとなしく目をつぶつて居る。これが建立者の本心から見た中尊寺の眞の意義で、この金色堂の光堂があれば、取りも直さず中尊寺があるといふべきではなからうか。

金色堂の味はひは言語を絶して居る。月見坂を登り、左右に建ち連つた堂塔の間を過ぎて、左の寶物陳列所を過ぎ、つぎに赤堂の前を過ぎると、左に曲る石段があつて、その左の角に「特別保護建造物金色堂」と書いた木標が立てゝある。その磴道の左右には、苔に



平泉變遷圖
現狀 舊態

惟康親王
八十八代後嵯峨
天皇の皇孫

さびた大杉が並び立つて、其の奥に、風雨に曝れた木造の建物が、緑青のふいた屋根を戴いて謙遜に控へて居る。これが謂はゆる覆堂で、鎌倉將軍惟康親王が此の光堂を保護する爲めに、特に營まれたものであり、屋根は明治二十六年に銅葺に改められたものである。

吾等は石段の上に立つて先づ心を驚かした。そして考へた。三代の榮華の魂が金色に光つて此の堂の中にあるのだ。そして其の魂を傷つけぬために、二重に覆堂でおほはれたのだ。あの覆堂も生白い材木が金色を遮つた出来立には、さぞ不釣合な色と形とによつて周囲の景致を傷つけたであらうが、六百年の歲月は此の木造家屋の色を、すつかり周囲に馴染ませた。同時に他の主要なる堂塔の焼失は、自然に中心の位地を此の堂に與へたので、其の外容の擴大が少しも目ざはりでないのみならず、却つて全山の景

致を引き立てるやうになつて來た。今になつては、まづ覆堂を見て心の驚きを鎮めて後に、金色の本堂に接するのが、むしろ正當の準備のやうにも思はれる。

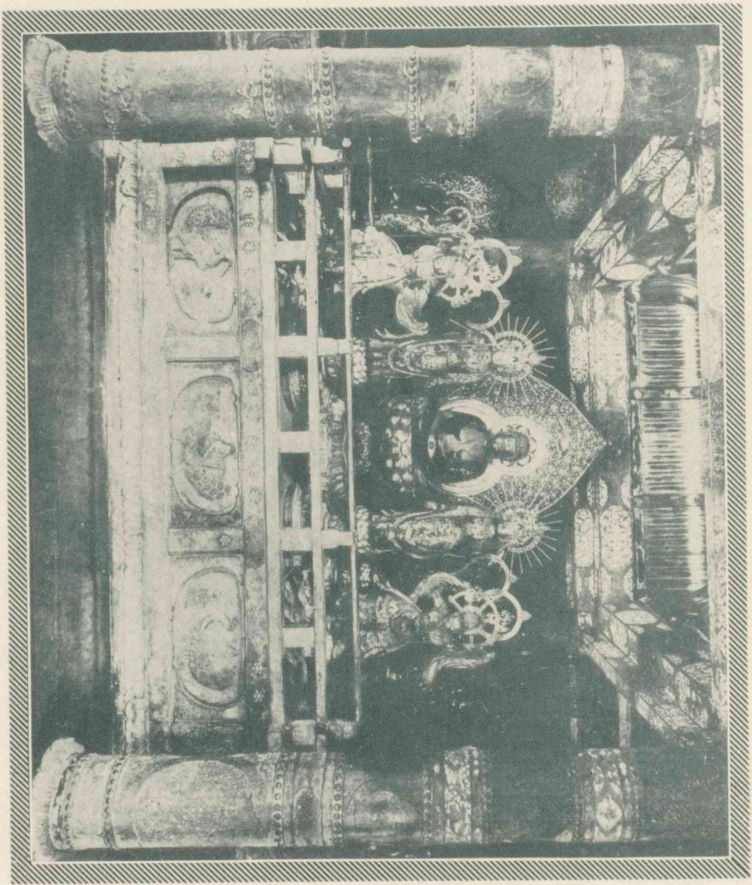
私は案内僧に導かれて靜かに磴道を上つた。そして東向の入口の闕を跨いだ。内は眞暗である。が、馴れる中に段々に見えて來た。佛様や柱や梁や隆起した部分が、まづちら／＼と見えて來る。やがて凡そはつきりして來たと思ふ時分に、案内僧の説明が始まつた。例の相手なきにしゃべるやうな、聲を空に飛ばすやうな口上である。

「本堂は金色堂とも申し、又光堂とも申し、今より八百十何年前、鳥羽天皇の天仁二年に藤原清衡公の建立されたものであります。外側の木造は覆堂と申して、正應元年に、時の將軍惟康親王の仰せによつて造られたものであります。金色堂の廣さは三

法橋定朝
平安朝の佛工
後一條天皇の治
安二年法橋に補
せらる。

泉三郎忠衡
秀衡の第三子

間四面で、其の中に安置された佛様は、すべて法橋定朝の名作であります。四本の柱は七寶莊嚴の卷柱と申して、本邦金溜蒔繪の始めであります。漆の厚さが五六分、今日造れば一本數萬圓でも出来ません。左の柱の一部分を削つて地肌を見せたのは、此の細工の手が込んで居る事を知らせる爲め、先年修復した時に、わざと此の通りに残したのであります。床の下には、清衡、基衡、秀衡、三代三將軍の遺骸を入れた棺が納まつて居ります。秀衡公の遺骸の側には、泉三郎忠衡の首桶があります。説明がすんでから、しばらく見とれて居たが、促されるので、顧み顧み立ち出でた。美しい建物である。光堂自身の全體としての外観は見るべくもないが、もし覆堂を徹して、光堂の正體を遠目に見ることが出来たならば、どんなに美しいことであらう、どんなに尊い光を放つことであらう。元祿の芭蕉は、五月雨の降りのこし



尊本堂色金

金色堂
 金色堂は光堂とも稱し、長治二年藤原清衡の建立した中尊寺の一字で、清衡、基衡、秀衡三代の墓廟である。内陣には佛壇があり、阿彌陀三尊、二天六地藏を安置し、内棺を入れて、清衡が木乃伊の遺骸を藏めてある。その後方左右の隅にもまた各々佛壇があつて、左に基衡、右に秀衡が木乃伊の遺骸を藏めてある。金色堂内外の裝飾は當時の工藝の精を極めたもので、圓中左右の圓柱は、殊に善美を極めたる故を以て有名である。

てや光堂」と歌つてゐる。雨の五月に來た芭蕉には、いかにも餘所は雨に曇つて、此處のみが佛光に明るいやうに見えたであらうが、夏の盛りに來た吾等には、却つて、眞夏日の照り残して、此處のみが、涼しく佛の慈光に潤つて居るやうに見えた。

吾等はつゞいて經藏を見、寶物陳列所を見た。それから本堂へ行つて、清和天皇勅賜の金印を扇に捺して貰つて、下向の途についた。月見坂を下つて暫らく行くと、左手にあたつて、青い畑の向うに小高い丘が見える。高館である。丈なす麻や芋の葉を掻き分けつゝ、草のいきれを嗅ぎつゝ登つた。まづ、義經堂に禮して東を望むと、北上川が眼下を流れて、其の向うには遙かに平野を隔て、東稻山が立つて居る。その昔、安倍頼時が一萬株の櫻を植ゑたといふ山である。後年西行法師が行脚して來て、芳野の外にかゝるべしとはと詠んだといふ所である。花の盛りに其の麓を流れ

東稻山
 陸中磐井郡

芳野の外にかゝるべしとは
 まよもせずたば
 しね山の櫻花吉
 野の外にかゝるべしとは

安倍頼時
貞任の父
陸奥の人
天喜五年戦歿

伽羅の御所
平泉館、金色堂
の正面、十餘町
を距つ。
柳の御所
平泉館北、高館
の南。

る北上川がすつかり櫻色に見えるので、櫻川と呼ばれたといふ名所である。眞夏の今日は、唯だ山の形と緑とを愛で得るばかりであるが、古奥州當年の指導者が、武力に秀でたのみならず、自然美、人工美の風流道に於いても、優れた大きい心を持つてゐたことが、これでも知られる。そして其の優れた大きい心の最後の持主は秀衡であつた。秀衡が一たび死んで、彼れの兒孫は皆碌々である。彼等はまづ頼朝に欺かれて、父の迎へた判官義經を殺し、一門やがて悉く頼朝に亡ぼされた。國破れて山河のみあり。残れる高館、東稻山、金鶏山、北上川、衣川、中尊寺、毛越寺、悉くこれ當年藤原氏一門の墓ではないか。

吾等は眞晝日をあびつゝ、高館を下り、又青い畑の間に柳の御所、伽羅の御所の跡を指點されて宿に歸つた。柳の御所は清衡、基衡の居城、伽羅の御所は第三世秀衡の居城である。

(「遠近」)

三宅雪嶺

名は雄二郎
政論家
文學博士
金澤市の人
萬延元年生

穆叔

周代、魯の大夫

Claeser

ローマの軍人、
政治家

Napoleon

佛帝
(1769—1821)

Homer

古代ギリシアの
詩人

一三 人生の快事

三宅 雪嶺

「大上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽。」と曰へるは、穆叔以前より行はれたりし格言なるべく、穆叔以後數千年を經て變ぜず。註に立德は黃帝、堯、舜、立功は禹、稷、立言は史佚、周任、臧文仲とあり。他の例を擧ぐれば、孔子、釋迦、耶穌の如きを立德とし、シーザー、ナポレオンの如きを立功とし、ホーマー以下の文學者を立言とすべし。この三不朽を智仁勇の達徳に配當すれば、立德は仁、立功は勇、而して立言は智なり。立功にも智を要し、立言にも勇を要すれど、主要なるものを擧ぐれば各、特色あり。中に史的の意義ありて、現代に認むるを難んずるは立德なり。現に立功家及び立言家の少なからざるに、稱して立德家とすべきものを何處に見

帚木
園原や伏屋に生
ふる帚木のあり
とは見えてあは
ぬ君かな
(坂上是則)

魏の文帝
姓は曹、名は丕、
漢の獻帝の諡
位をうけて帝位
に即き、國號を
魏と改む。文藻
に富む。

Voltaire
佛國の文豪
(1694—1778)

るか。立功及び立言は全く現實の事にして、過去にもあれば、現在にもあり、將來にもあるべく、立德の漠然たるが如くならず。今は立德の形跡あるものも、立功と立言と孰れかに屬すべきが如し。三不朽の中、立德は人の欲求する所の絶頂にして、聖たり佛たるは人生第一の快事なるかに考へらるれど、帚木ほきぎの如く之れを求めて遂に見失ふに終らん。現代の人の志す所は立功ならざれば立言なり。

魏の文帝曰はく、年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。是れ文事に與る者の期せずして考へ及ぶ所に於て、筆は劍より強しといふも、其の旨相近し。ヴォルテール曰はく、功名心ある者にして悉く目的を達し得べくは、悉く文字の人となるべし。と。ホーマーは傳明らかならざれども、傳説に依れば、琴を携へて人の門前に立ち、且つ謠ひ且つ語れる者なりといふ。明

を失ひしが上に、門附の如く絃歌して錢を乞ひしものならば、苦痛なる生活を送りしなるべきに、後世之れを歎美して已まず、彼れの如くんば死すとも可なりと考ふるもの常にこれあり。凡そ苦心



三 宅 雪 嶺
惨澹の甚だしきこと、詩人の句を撰するが如きは少なし。司馬相如の子虚賦、左思の三都賦、辭を練るに全力を用ゐき。杜少陵が爲人性癖耽佳句、語不驚人死不休といへる、眞に實狀なり。幾多詩人中には、強ち人を驚かさんとせず、或は之れを喜ばしめんとし、或は之れを悲しましめんとし、或は之れを別乾坤に導かんとするもあるべけれど、要するに皆多少目的を達する所に愉快を感じ、洛陽の紙價を貴くせる時、誠に大勝利を得たる如く悦びたるならん。

司馬相如
文章家
漢の人
字は長卿

左思
文章家
晋の人
字は太冲

杜少陵
唐の詩人
名は甫
少陵と號す
字は子美

る時、誠に大勝利を得たる如く悦びたるならん。

Michelangelo
 伊太利の畫家、彫刻家、建築家 (1475—1564)

Sixtus
 ローマ法皇シクストの建てし宮廷内法王専用の禮拜堂

Darwin
 英國の博物學者 (1809—1882)

Shakespeare
 英國の詩人劇作家 (1564—1616)

Archimedes
 ギリシヤの理學者 (282—212 B.C.)

形を異にして實を同じくするは、詩と藝術、文と科學なり。「言は意を盡くさず、文は言を盡くさず」といへり。藝術家の製作に従事するは、樂しきか、樂しからざるか、樂しくとも世間の想像する所とは同じからじ。ミケランジェロの工場に入りし者は、彼れの努力に驚かざるなし。夜更けて眠りしかと思へば、突然起きて頭に蠟燭を翳し、着手しつゝある製作に従事す。シスト禮拜堂の天井畫を完成せし時、絶えず仰ぎ居りしが爲めに頸が曲らざりきといふ。彼れは上下に重んぜられて、生活も豊かなりしが、肉體の満足を事とせず、繪畫及び彫刻に汲々たりしは、苦心慘澹の間にも漸く理想に近づく愉快の禁じ得ざるものありしに因りてなり。科學家は天地の美を讚歎せず。世間に美として讚歎する所をも嚴密に分解して、眼中美もなく醜もなし。ダーウィンは自ら歎じて曰ふ、「吾れはシェークスピアを讀みて少しも興味を感じず」と。アルキミデス

Alexander
 マケドニア王 (356—323 B.C.)

は敵兵に襲はれし時、恰も砂上に幾何學の圖を描きて、一意研究しつゝありしが、彼等を顧みて曰ふ、「暫らく待て、問題を決せん」と。言ひ終はらずして殺されきといふ。眞に研究を念とする者は、必ず別に樂しむ所あり、而して其の樂しむ所は常人の樂しむ所と異なり。若し之れを稱して樂しむといふべからずんば、他の何物にも代ふべからざる方針を取りて進みつゝありと謂ふべし。「英雄何、必讀書史」とは何處にも言ひふるされたる言なり。秦平無事の日にはかく考ふる者多からざれど、警報傳はりて多少世間の動搖する時には、風雲に際會すといふを事實にせんと欲する者、或は曰はく、大丈夫當に屍を馬革に裹むべしと、或は曰はく、男兒當に天下に横行して富貴を取るべしと。出でては將、入りては相、若し之れを併せ得ること困難ならば、せめて其の一を得るの愉快なるべきを思ひ、遠きはアレキサンデル、近きはナポレオン、人生れて彼等の如

Persia

くなるを得ば、萬死して憾みなしとす。其の何れが望ましきかと問へば、言ふ迄もなく天下を掌にし、事として意の如くならざるなきにあれど、彼等果たして世人の想像するが如く愉快を感じたりしか。アレキサンデルは天真爛漫、直情徑行、一切の偽善を憎み、ペルシヤに遠征してペルシヤの歡樂に耽りしに似たれど、彼れは苟も無道といふを敢てせず。當時の社會状態より考ふれば、身を律するの嚴なりしを認めざる能はず。彼れの愉快を感じずるは富貴に在らず、無上の權を振ふに在り。歳三十にて歿し、能く彼れの如きを致したるは偶然にあらず。ナポレオンの幸福なるは十七歳までなりといふものあるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心の安寧を得ざりしを指すなり。されどナポレオンの愉快を感じずるは、安樂の生活よりは、寧ろ南征北伐の間に存せずや。彼れは一種の理想に生き、之れに近づくを以て満足せし者、その口

Rome

Alp

孔子

儒教の祖

名は丘

字は仲尼

周代魯の人

年七十三

釋迦

佛教の祖

印度加比羅國の

太子として生る

年八十

(485 B.C.)

耶蘇

キリスト教の祖

ガリラヤの人

イマを模範とし、世界の地圖を改め、永遠の平和を計れる、實に時代を超越せる觀あり。衣囊にホーマーを置き、劍を以て世界を切り從へんとの抱負を遂行せんとし、胸中の悶々たる時には、涌くが如き智略とアルプを抜く勇氣とに快感を覺えたるべく、遠洋の孤島に流さるゝや、居常鬱々たりきとはいへ、自ら古來の英雄に比較して満足を感じたるならん。

帝王は一世の尊、而も孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の寺に跪けり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきものを擧ぐれば、斯く帝王を跪かしむる立德家なりとすべく、隨つて志の大なる者の、以て人生の最大快事とするは、之れに彷彿たるに在り。されど、彼等がたとひ能く立德家の如くなるを得たりとも、果たして愉快なるを得べきか。功名心の熾んなるものは、後世に於ける勢力の孔子、釋迦、耶蘇の如くなるを欲しつゝ、現在に於

分け登る麓の路は多けれど同じ高嶺の月を見るかな (道歌)

いて孔子、釋迦、耶蘇の如き不遇、又は不快なる生活を送るを欲せざるべし。もと立德は人生の美點を綜合して考へたるもの、人生の完成を以て衆徳を具ふるにありとし、暫らく史的人物を藉りて之れに充つるのみ。人生最上の目的は立德なりと雖も、立德家たらんには、如何にせば可なるかといへば、容易に解答を與へ難し。分け登る麓の路は多けれど、同じ高嶺の月を見る。立德は高嶺の月なり。而して麓の路の最も主要なるものは、實に立言及び立功に在り。立言に種類あり、詩あり、文あり、藝術あり、科學あり。立功に種類あり、軍事あり、政治あり、商業あり、工業あり、農業あり。之れを細分すれば頗る多數に上るべけれど、其の孰れかを念とし、十分にその能力を伸ばさば、幾何か立德たるを得ん。

高山の絶頂は寒冷にして風強く、久しく居るに堪へず。而も健脚なる者は、麓にありて百花の咲き亂るゝを觀て満足せず、必ず蒼

Himalaya

印度と西藏との境にある山脈、最高峰エベレストは二萬九千二百呎、未だ絶頂を極めたる人なし。

空を凌がんことを期す。歡樂は麓にあり、安易は麓にあり、日常の愉快は悉く麓にあり。されど他人より身體の強健なる者が女兒の樂しむところの外に出でざるは、いさゝか物足らず覺ゆべく、時に餓を忍び、寒に堪へ、絶頂に至りて千里一望の快をほし、いまゝにせんとす。或はアルプを低しとし、全く人跡絶えたるヒマラヤ山に登らんと企つ。而して若し幸にその上に立たんか、千古の氷雪萬里に亘るを見て、壯絶快絶壯絶々を叫ばん。女兒も之れを聞いて地球の最高處に立つの如何に愉快なるかを想像し、唯だ己の企て及ばざるを歎ぜん。蓋し形而下の快事は多數の求むるところにして、形而上の快事は少數の求むるところなり。而も求むると求めざるとの差こそあれ、形而上の快事を以て人生の最大快事なりと認むるは、世間一般に通じて動かすべからざるところの事實なり。

(『日本及日本人』)

一四 光頼卿參内

(平治物語)

同じき十九日
平治元年十二月
十九日

光頼
藤原顯頼の子
桂大納言と稱す
承安三年薨
年五十

信頼
藤原氏
光頼の甥
清盛に斬らる
年二十七

さる程に内裏には同十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、此の程は信頼卿の振舞過分なりとて、不参にておはしましけるが、参内して承らんとて、殊にあざやかに束帶引き繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに帶き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の装束に出で立たせ、自然の事もあらば人手にかくな、汝が手にかけて、光頼が首をば急ぎ取れとて、御身近く置き、其の外清げなる雑色四五人召し具して、大軍陣を張りて所々門々を固め守護しけるを事もせず、前高らかにおはせて入り給へば、兵共も大きに恐れ奉り、弓をひらめ矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後ろを経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その

信頼卿一座して、その座の上、藤達皆下にぞつかれける。
母方の舅
光頼は信頼の母の兄に當たる。

衛府督
右衛門督信頼の事。

座の上藤達皆下にぞつかれたる。光頼卿、こは不思議の事かな。人は如何に振舞ふとも、あれは右衛門督、我れは左衛門督なれば、下には着くまじきものと思はれければ、左大辨宰相、方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見え候へと、色代して閑々と歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。光頼卿は、信頼卿のためには母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あなさましと見給ふに、光頼卿下襲の尻引き直し、衣紋つくろひ、笏取り直し、氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候。召に参ぜざらん者をば死罪に行はるべしとやらん承りて、参内する所なり。抑、何事の御詫ぞと問はれけれども、信頼物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程を経て光頼卿つい立つて、悪しう参り

賴光、賴信
共に源滿仲の子

て候ひけり。とて、閑々と歩み出でられけり。庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれ此の殿は大剛の人かな。去る十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く一人もおはしまさざりつるに、仕出したる事よ、門を入り給ふより聊かも臆したる體も見え給はず。哀れ此の人を大將として合戦せば、如何ばかりか頼もしからんと申せば、傍らなる者、昔頼光、賴信とて源氏の名將おはしましき。其の頼光を打返して光頼と名乗り給へば、是れも剛にましますぞかしといへば、又傍らより、など其の頼信を打返して、信頼とつき給ふ右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞといへば、壁に耳、天に口といふ事あり、怖ろしく聞かじといひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小部の前、見參の板、高らかに踏み鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊りに、

上り部、
三上り部、
見つるに
没せしむる

別當惟方
檢非違使別當
藤原惟方

其の人皆當時の
有職然るべき人
共なり。

少納言入道
藤原通憲入道信
西

神樂岡
今の京都市の東
北部に在り。

別當、それは天
氣にて候ひしか
ばとて、赤面せ
られけり。

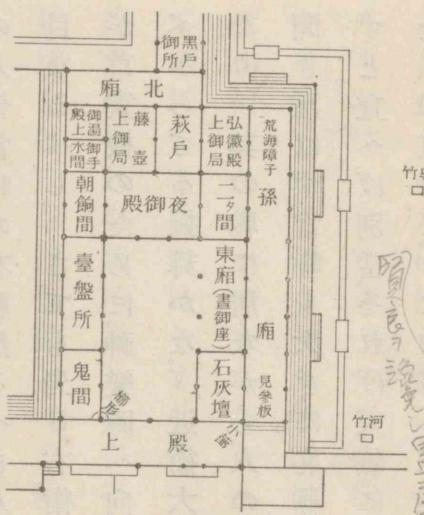
勸修寺内大臣
藤原高藤
三條右大臣
高藤の子定方

弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、参じたれども承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人数にてあなる。傳へ承る如きは、其の人皆當時の有職、然るべき人共なり。其の中に入らん事甚だ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乗りて、少納言入道が首實檢のために、神樂岡へ向はれける事は如何。以ての外、然るべからざる振舞かな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。其の職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふ事、先蹤もいまだ聞き及ばず、當時も大きに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならずと宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかばとて、赤面せられけり。光頼卿重ねて、こは如何に、勅諛なればとて、いかで存ずる旨を一儀申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより、以來、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふ事は皆是れ

先蹤り昔も
赤面せられ
けり

廿五後家
清華 華族
接見し接見するらん家柄
三つ分おかしき大政大臣
子生せし止む

大貳清盛
平清盛當時の官
大宰大貳なり
切目の宿
紀伊國日高郡



清涼殿平面圖

徳政なり、一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴ひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかる程の事はなかりしに、御邊始めて暴悪の臣に語らはれて、果家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は、熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せ上るなるが、和泉、紀伊國、伊賀、伊勢の家人等待ち受けて、大勢にてあなる。信賴卿が語らふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押し寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若し又火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりた

如何に況んや君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事王道の滅亡、此の時にあ

主上
第七十八代二條天皇
上皇
第七十七代後白河天皇

らんだにも、朝家の御歎きなるべし。如何に況んや君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事王道の滅亡、此の時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申し合はするとこそ聞こゆれ。相構へて相かまへて、隙をうかひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。黒戸の御所に。上皇は一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劔璽はいづくに。夜のおとどにと、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。又朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞと宣へば、それには右衛門督住み候へば、其方様の女房などぞかけろひ候ふらんと申されければ、光賴卿聞きもあへず、世の中は今ばかりくござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には、信賴住み、君をば黒戸の御所に遷しまるせたり。末代なれども、流石に日月は未だ地に落ちたまはぬものを、天照大神、正八幡宮は、王法を如何守

五代、流石、末代、の時代

不世、流石、の時代

前代未聞の不思議かな。

許由
支那古代の隠士、堯が天下を彼れに譲らんとせし時、穢き事聞きて汚れたりて、潁水にて耳を洗ひたり。

りたまひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、我が朝にはいまだかくの如き先蹤を聞かず、前代未聞の不思議かなとて、のろしげに憚るところなく口説きたまへば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、且つは悲しくて、我れ如何なる宿業に依りて、かゝる世に生れ合ひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かんともがらは、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れとて、上の衣の袖しほるばかり泣かれけり。信頼の座上に着せられし時は、さしも由々しく見えたまひしが、君の御事を悲しみて、打ちしをれてぞ出でたまひける。

一五 新古今集より

後鳥羽上皇

みよし野のたかねの櫻ちりにけり

嵐もしろき春のあけほの

見わたせば山もとかすむ水無瀬川

ゆふべは秋となに思ひけむ

春の夜の夢のうき橋とだえして

峯にわかるゝ横雲の空

旅人の袖吹きかへす秋風に

ゆふひさびしき山のかけはし

駒とめて袖うちはらふかげもなし

藤原定家

鎌倉時代の歌人
新古今集の撰者
京極中納言と稱せらる
仁治二年没
年八十

藤原家隆

鎌倉時代の歌人
新古今集の撰者
壬生二品と稱せ
らる

嘉祐三年歿
年八十

詠下品上生和歌
民部卿藤原定家
たちかへる夢のた
だちにをしへおく
うてなの花の末の
うは露

佐野のわたりの雪の夕暮

藤原家隆

おもふどちそことも知らず
行きくれぬ花の宿かせ

野邊のうぐひす

下紅葉かつ散る山の夕しぐれ

濡れてやひとり

鹿の啼くらむ

詠下品上生和歌

民部卿藤原定家

おもふどちそことも知らず
行きくれぬ花の宿かせ
野邊のうぐひす
下紅葉かつ散る山の夕しぐれ
濡れてやひとり
鹿の啼くらむ

藤原定家筆蹟

藤原實定

平安末期の歌人
後徳大寺左大臣
と稱せらる
建久二年歿
年五十三

志賀の浦やとほざかりゆく波間より

こほりて出づるありあけの月

藤原實定

藤原俊成

鎌倉初期の歌人
千載集の撰者
元久元年歿
年九十一

なごの海のかすみの間より眺むれば

入日をあらふおきつ白波

藤原俊成

むかし思ふ草の庵の夜の雨に

涙な添へそ山ほととぎす

藤原秀能

夕月夜しほ満ちくらし難波江の

蘆の若葉をこゆるしら波

藤原良經

人すまぬ不破の關屋の板びさし

荒れにし後はたゞ秋の風

藤原雅經

みよしのの山の秋風さよふけて

藤原良經

鎌倉初期の歌人
太政大臣
建久元年歿
年三十八

藤原雅經

鎌倉初期の歌人
新古今集撰者
承久三年歿
年五十二

源信明

平安朝の歌人
三十六歌仙の一人
天祿元年歿
年六十一

詠 曉紅葉之和歌

侍從藤原

かねの音も枕にち
かし嵐山あけなば
よその秋の色かは

藤原公衡

鎌倉時代の歌人
左大臣
正和五年歿

宮内卿

鎌倉時代の女流
歌人

後鳥羽天皇に仕
へた女房

行慶

平安朝の歌僧
白河天皇の皇子
三井寺に住す

古里さむく衣うつなり

源 信 明

ほのくと有明の月の月影に
紅葉吹きおろす山おろしの風

藤 原 公 衡

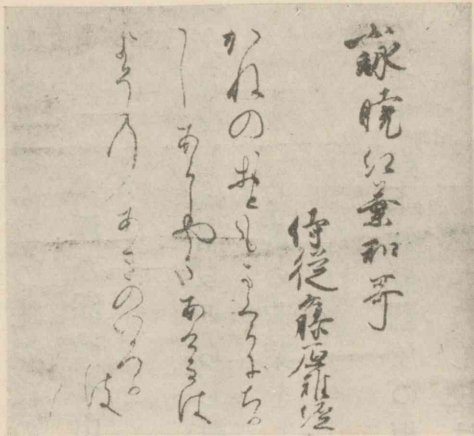
狩り暮らし交野の眞柴折り敷
きて淀の川瀬の月を見るかな

宮 内 卿

うすくこき野邊の緑の若草に
あとまで見ゆる雪のむら消え

大 僧 正 行 慶

つくくと春のながめのさびしきは
しのぶに傳ふ軒の玉水



藤原雅經筆蹟

寂蓮

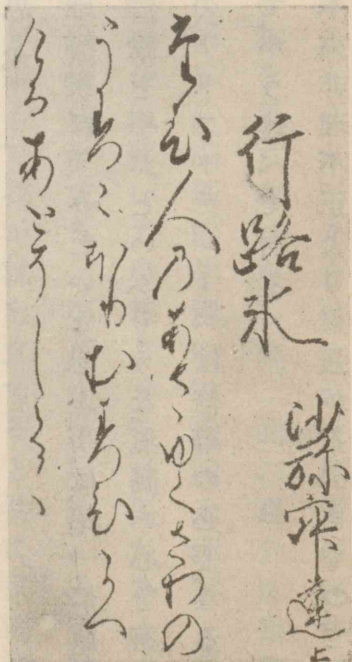
鎌倉時代の歌僧
俗名藤原定長
俊成の養子
建仁二年歿

行路水

旅人の朝ゆく澤の
うす水むすびかへ
けるあとぞ知らる

寂蓮法師

むらさめの
露もまだひぬ
槇の葉に
霧たちのぼる
秋の夕暮



寂蓮法師筆蹟

能因

平安朝の歌僧
俗名橋永愷

能 因 法 師

山里の春の夕ぐれ来て見れば

いりあひの鐘に花ぞ散りける

一六 雄辯をいふごと

口に説く辯論は、目に訴へる文章と相並んで、人生の一大要事

明治の初年に福澤諭吉翁が西洋式の演説を始めた。

ある。この辯論の術は、我が國に於いても昔から我が國獨特の形式で行はれて来たが、殊に明治の初年に福澤諭吉翁が西洋式の演説を始められてからは、非常な勢を以て廣布し發達した。そして演説、討論、講演、講談、いろ／＼な形式の下に、あらゆる方面に於いて驚くべき隆盛の影を見せては居るが、完全を望む心には、身振、詞遣、その他いろ／＼の點に於いて未だしく思はれるところがある。左にそれを略記して、この大切な新しい文化的事業の爲めに備はることを求めたいと思ふ。

吾々がこれからの雄辯家に望みたいと思ふ事は、第一に、眞理正義を擁護する爲めに辯説を學ぶといふやうな、氣高い心を有つことである。ギリシヤのアリストテレスは、修辭の必要なる所以が四ヶ條あると云つて、かう述べて居る。

第一に、眞理正義は本來非理不正よりも強かるべきものである。

第一に眞理正義を擁護する爲めに辯説を學ぶこと。
Aristoteles (384-322B.C.)
プラトンの弟子でギリシア哲學の大成者
修辭の四大効用

アリストートルの修辭論
一 匡正的の役目
二 教訓的の役目
三 暗示的の役目
四 防衛的の役目

故に若し眞理正義の敗るゝことがあらば、それは辯者の過失によるので、さる場合には之れを正さねばならぬ。此の場合に修辭は匡正的の役目をする。第二に、論理的、學理的の説明を理解し得ぬ俗衆に對しては、それを通俗に碎いて會得させる必要がある。此の場合に修辭は教訓的の役目をする。第三に、首尾よく人を説得するには、問題の兩面から論じて、我が説を立てると共に、反對説を破らねばならぬ。修辭は論理と同じく、正にも、邪にも、積極にも、消極にも、偏頗なく武器を貸すもので、吾々が一つの説を立てようとする場合に、如何なる反對説が立ち得るかを示して、之れを説破する方法を考へさせる。此の場合に修辭は暗示的の役目をする。第四に、人間の特色は身體活動の點よりは、寧ろ言語を有する點にある。もし身體によつて自ら防衛し得ないのが不面目ならば、言語によつて自ら防衛し得ないのは、更に不面目といはねばならぬ。

而して修辭は、言語によつて一種防衛的の用をなすものである。匡正、教訓、暗示、防衛、之れを修辭の四大効用と云つてよい。といふやうな事を云つて居る。かう云へば、誰れも知つて居る平凡な説のやうではあるが、吾々は後世の修辭學者や雄辯家達の説く所、行ふ所に比べて、非常に偉い見識だと思つて居る。そして今の雄辯家達に斯様な見識を持つて貰ひたいと望むのは、あなたがち解り過ぎた餘計な沙汰でもあるまいと考へて居る。

第二に、吾々は今の辯説家の言葉を、もう少し磨き上げたいと思ふ。話す言葉其のまゝが立派な文章をなすとまでは行かずとも、せめては照應の辻褄が合ひ、係り結びの連絡がついて、一通り無難な文章になるやうにしたいものだと思ふ。一體我が國の近代、殊に現代に於いては、言と文とが二途に分かれて各、別々の途を歩いて來た結果、又其の間の調和を企てる人の少なかつた結果、一面に

第二辯説家の言葉
を磨き上げる
こと。

辻褄の合はぬ
襤だらけの悪文
章。

於いては、文章が目で見えて心で考へる一方のものとなり、他の一面に於いては、説話が口で話して耳で聞き流す一方のものとなつた。従つて、文章は、書いた文字を目で見えて考へれば解るが、口で讀むのを耳で聞いては、一向早呑込の出來ぬものとなり、辯説は耳だけでは面白く聞き流されるが、一旦テニヲハを辿つて文脈を調べて行くと、辻褄の合はぬ襤だらけ穴だらけの悪文章に、愛想が盡きるといふ傾きがある。是れは謂はゆる雄辯家の説話をそのまゝ筆記する速記者の、悉く認めて居る事實で、又速記録を見せられた辯者自身の、概ね意識して居ることである。これは、一つは今迄辯説を重んじなかつた我が習慣の罪であり、また我が文化發達の途中の繋ぎの時代に見る止むを得ぬ變則の現象ではあらうけれども、出來るものなら、もう少し磨きをかけ文脈を整へて、普通の演説でも、一通りは文章として物になつて居るやうにし、すぐれた物は一

Tagore
(1861-)
現代インドの詩人、哲學者
大正五年及び昭和四年に來朝す

一粒選の名士
慚愧の冷汗を流す。

第三我が國の雄辯に教則、個條テクニックを定めること。

Technique

種の文學にもなるやうにしたいものであると思ふ。曾て印度の詩人タゴール氏が來朝して、諸方で演説をされた時にお客のお話がいづれも玉のやうに磨きのかゝつた藝術品であるのに對して、その序をなし、跋をなした我が一粒選の名士の演説が、おほむね粗笨、蕪雜、乖離、亂脈のものであつたので、思はず慚愧の冷汗を流したことがあつたが、今の文章が、口語に近づいて大分耳近く成つたのに對し、演説の方でも、もう少し整つた落ちついたのを耳にしたいものだと思ふ。

第三に、吾等は我が國の雄辯に、教則、個條、テクニックといふやうなもの定まることを望んで居る。殊に身振について、もう少し通規といふやうなものが成立つたならばと考へて居る。西洋の辯説は、大昔から立話式たちばなししきで、音聲の抑揚はもとより、鼻のかみかたから、手使ひ、身振りに至るまで、凡べてそれに相應した一種の型が出

來て居るが、我が國には、古式、新式、東洋式、西洋式、坐談式、立談式の混淆から、いろ／＼不思議な落着きのない身振態度が行はれて居る。斯様な諸流並行も見様によつては、一種空前の偉觀で、面白くもあらうけれども、維新以來もう六十餘年にもなるのだから、そろ／＼其の方面の小笠原某、伊勢某といふやうな式法定めの名人が出て、手使ひ、身振から、息心調和の腹の据ゑやう、息つぎ言葉あしらひの間拍子まびょうしなどいふことまで、精神に裏づけられた形式の研究を、綿密に正確にして呉れたら、どうであらうか。さすれば奇態百出の演壇の上に、一種の優美な規律と調和とを見ることが出来るであらうに。

吾々は我が雄辯界の方面に於いても、文學界に劣らぬ立派な藝術品を見たいと思ふので、ついこんな事を考へるのである。一つの誠實さへあれば、枝葉の形式はどうでもよいやうなもの、しか

しながら事實は形式内容相伴うて始めて理想的の結果を見るべきものであらう。
〔國語の愛護〕

一七 羅馬の二雄辯

坪内逍遙譯

ブルータス演壇に上る。

二市民 ブルータスどのが登壇せられた。静かに〜！

ブルー 濟むまで静肅にして下さい。…羅馬人よ、國人よ、親友諸君よ！ 予の主意を聽いて下さい、主意を聽いて下さるために静かにして下さい。どうか予の人格を信じて下さい、信じて下さるために予の人格に重きを置いて下さい。予は諸君の賢明な批判を乞ひます、どうか賢明な批判者たるに適するやうに、諸君が分別力を活用せられんことを望みます。…若し此の群衆

Brutus
ローマの元老院議員西紀前四十四年シーザーを暗殺したが、後アントニオ等のために敗れる。(西紀前四十二年)

予の主意を聽いて下さい、主意を聽いて下さるために静かにして下さい。どうか予の人格を信じて下さい、信じて下さるために予の人格に重きを置いて下さい。

Julius Caesar
(100-44B.C.)

シーザーは予を愛してくれたゆゑに、予は彼の爲めに泣きます。彼れは好運であつたゆゑに予はそれを歡びます。彼れは勇敢であつたゆゑに、予は彼れを

中にシーザーの眞の親友と稱すべき人が居らるゝならば予は其人々に對つて、ブルータスがシーザーを愛する心も決して其の人に劣らなかつたと斷言します。然らば何故ブルータスはシーザーに刃を加へたかと、斯う其の人が問はれたならば、予は斯う答へる。それは、シーザーを愛する心が薄かつた爲めではない、羅馬を愛する心が更にそれよりも厚かつた爲めであると。諸君はシーザーが生きてゐて、それが爲めに一同が奴隸となつて死ぬのを望まれますか、シーザーが死んで一同が自由の人民となるよりも？…シーザーは予を愛してくれた故に、予は彼の爲めに泣きます。彼れは好運であつたゆゑに、予はそれを歡びます。彼れは勇敢であつたゆゑに、予は彼れを尊敬します。併しながら彼れは野心を抱いたゆゑに、予は彼れを誅戮しました。愛に報ゆるには涙を以てし、幸運を祝ふには歡びを以てし、

尊敬します。併しながら彼れは野心を抱いたゆゑに、予は彼れを誅戮しました。此處に羅馬人たることを欲しないやうな野鄙な人間が一人でもあるか？ 有るならお言ひなさい。其の人に對しては、予は罪を犯した。

勇敢を稱するには名譽を以てし、野心を罰するには死を以てする。…此處に奴隸となるのを願ふやうな卑劣な人間が一人でもあるか？ 有るならお言ひなさい。其の人に對しては、予は罪を犯した。此處に羅馬人たることを欲しないやうな野鄙な人間が一人でもあるか？ 有るならお言ひなさい。其の人に對しては、予は罪を犯した。此處に其の國を愛しないやうな卑劣な人間が一人でもあるか？ 有るならお言ひなさい。其の人に對しては、予は罪を犯した。予は返答を俟ちます。

市民等 無いよ、ブルータス、無いよ。

ブルー では、何人に對しても予は罪を犯さないのである。シーザーに對して予の爲た事は、諸君がブルータスに對してなさるべき事に外ならんです。シーザーを誅した理由は、逐一議事堂の記録に登録してあります。彼れが榮譽功績に屬する事を、

Mark Antony
(83-83B.C.)

滅殺しないと同時に、誅さるゝに至つた所以の罪惡の如きも、決して誇張してはありませぬ。…

アントニー及び其の他の者シーザーの死骸を擔荷ひつゝ出る。

あそこへ、マーク、アントニーが喪主となつて、シーザーの死骸を持參しました。彼れはシーザー誅戮の企圖には與りませなんだが、其の利益は享樂して、此の共和國に於ける相當の權利を得る筈です。これは諸君とても同様であります。…さてお別かれするに臨んで、一言申すことは——予は羅馬の幸福の爲めに又と無い親友を殺いたのであるから、同じ短劍の此の身に對して用ゐられんことを望みます。若し我が國が予の死を欲する場合となつたならば。

市民等 ブルータス、萬歳！ 萬歳！ 萬歳！

一市民 凱旋式で以てブルータスを自宅まで伴れてゆかう。



(劇會協藝文) 説演のーニトンア

ブルー 國人諸君よ、予は一人て歸らして下さい。お願いですから、諸君はアントニーと共に此處に留まつて下さい。シーザーの遺骸に敬意を表して下さい、且つシーザーの舊功を稱するアントニーの弔辭を聽いてやつて下さい、わたし共が許してさせるのでありますから。予が願ひします、アントニーの弔辭が濟むまでは、一人も退場せられないことを望みます。ブルータス入る。

一市民 待つたり〜！ マーク、アントニーの弔辭を聽かうよ。
 二市民 アントニーを演壇へ上らせませうぜ。弔辭を聽きませう。
 ……アントニー君、お登んなさい。
 アント ブルータス君のお庇で、諸君、かたじけなく存じまする。
 四市民 ブルータスの事を悪く言つちやあ大變だからな。
 一市民 あのシーザーといふ奴は酷い奴だつたね。
 三市民 そりや君、定つてらあね。あんな奴の居なくなつたのは羅馬の幸福だね。
 二市民 シ〜！ アントニーが如何なことを言ふか、聽かうぜ。
 アント 諸君よ、羅馬人諸君よ〜
 市民等 おい〜しづかに！ 聽かうぜ〜。
 アント 親友よ、羅馬人よ、國人諸君よ、御靜聽を煩はしたい。自分が此處へ參つたのは、シーザーの葬儀を行はんが爲めで、彼れを稱

彼れは自分の親友であつた、自分に對しては忠實な、公平な友であつた。が、ブルータスは彼れは野心を抱いてゐたと言はれる、而してブルータスは公明正大の人である。

讚せんが爲めではない。人の行つた悪事はその死後までも残るが、善事は往々にしてその骨と共に埋没します。シーザーの如きも亦さうあらしめた方がよろしい。：：ブルータス君は、シーザーは野心を抱いたと申された。果たして然らば、それは甚だ痛ましい過失であつて、シーザーは甚だ痛ましい應報を蒙つたのである。こゝにブルータス君をはじめ、他の人々の許可を得て——蓋しブルータスは公明正大の人であり、又その他の人々も悉く公明正大の人々でありますから——許可を得て、こゝにシーザーを葬るの辭を演べるのであります。：：彼れは自分の親友であつた、自分に對しては忠實な、公平な友であつた。が、ブルータスは、彼れは野心を抱いてゐたと言はれる、而してブルータスは、公明正大の人である。：：シーザーは嘗て夥多の捕虜を羅馬へ伴ひ還つた、その償金は悉く國庫に收められた。こ

の、シーザーの行爲が野心家らしく見えましたらうか？：：嘗て貧民が飢餓に叫ぶのを聞いて、シーザーは涙を流いた。野心は一層峻酷な素質のものでなければならん。なれどもブルータスは彼れは野心を抱いたと言はれる、而してブルータスは公明正大の人である。公明正大の人である。：：諸君はいづれも御覽になつたであらう、リユーパアカルの祭日に於いて、自分は三度迄王冠をシーザーに呈した、それを彼れは三度までも辭した。あれが野心でありませうか？：：なれどもブルータスは彼れは野心を抱いたと言はれる、而して確かにブルータスは公明正大の人である。自分は決してブルータス君の言はれた事を駁撃しようとするのではない、只だ知つてゐる限りの事實を申すのである。：：諸君は何れも嘗てシーザーを愛してをられた。それには理由が無かつた譯ではない。然らば、如何なる理由で諸君は彼れを哀悼す

御免下さい。予の精神はシーザーと一緒に、この柩の中に入つてしまつてゐる。

ることを差控へられますか？……お、判断力！理非を判
ずる分別力は、今は獸類なぞの有に歸して、人間は理性を失つて
しまつたのか？……御免下さい。予の精神はシーザーと一緒に
に、この柩の中に入つてしまつてゐる。それが戻つて來るまで
は物が言はれません。

一市民 大ぶ言つてゐることに道理があるやうだね。

二市民 正當に考へて見ると、シーザーは甚だしい冤罪を蒙つたと
も言へるね。

三市民 ね、さうでせう？ もつと悪い奴が出て來て代はるまいも
のでもないからね。

四市民 アントニーの言つたことにお氣が附きましたか？ シー
ザーは王冠を受けませんでした。だから確かに彼れは野心家
ぢやなかつたのです。……さあ、聞いたたり。又始めますよ演

説を。

アント つい昨日まではシーザーの一言は全世界に匹敵すること
も出來たのであつた。今や彼れは此處に横たはり、如何なる卑
しき匹夫と雖も、彼れに尊敬の意を致さうとはしない。……お、
諸君よ、若し自分がかかりにも諸君を煽動して憤激せしめ、反抗の
念を起こさしめるやうである、これ取りも直さずブルータス
を傷け、カシヤスを傷けることとなる、が、あの人たちは、諸君御存
じの通り、公明正大の人々である。自分はあの人々を傷けるこ
とを欲しない。自分はあのやうな、公明正大な人々を傷けるよ
りは、寧ろ世に亡き者を傷け、自分を傷け、諸君を傷けた方が當然
と思ふ。……併しながら此處にシーザーの捺印を経た一葉の書
面がある。自分はこれをシーザーの納戸内に於いて發見しま
した、すなはち彼れの遺言狀である。若し平民諸君をして、唯一

あのやうな、公明正大な人々を傷けるよりは、寧ろ世に亡き者を傷け、自分を傷け、諸君を傷けた方が當然と思ふ。

寸この遺言狀の主旨を聽かしめたならば、——御免なさい、無論自分は讀みはしないが、——若し聽かしめたならば、諸君はシーザ一の死骸に驅け寄つて、その傷口に接吻し、その神聖な鮮血に各自の手巾を浸すどころでなく、その頭髮一筋をも後の記念にと争ひ求めて、其の身死なんとする間際には、遺言中にそれを記入し、永く子孫に譲り傳ふべき寶物ともせらるゝであらう。

四市民 其の遺言狀が聽きたい。讀んで下さい、マーク、アントニー。

市民等 遺言狀、々々々！ シーザ一の遺言狀が聽きたい。

アント まあ、お鎮まりなさい。遺言狀を讀んではなりません。シーザ一が深く諸君を愛してゐた事を諸君が知らるゝのは宜しくない。

シーザ一が深く諸君を愛してゐた事を諸君が知らるゝのは宜しくない。

激して狂氣の如くにもならるゝであらう。諸君はシーザ一の

財産の相續人ぢやなぞといふ事は知られんがよろしい。若しそれを知られたなら、おゝ！ どんな事になるやら圖られない。

四市民 遺言狀を讀んで下さい！ 是非聽きたいんです、アントニー。

一。是非遺言狀を讀んで下さい、シーザ一の遺言狀を。

アント しばらく、しばらく待つて下さい。……あゝ、つい不覺的口走つてしまつた。公明正大の目的の爲めに、短劍を以てシーザ一を刺し殺いた人たちを傷くることにならねばよいが、あゝ、困つたことになつた。……ではどうしても遺言狀を讀めと言はれませんか。では、シーザ一の遺骸の周圍へ環形におんななさい。遺言狀を製した當人を諸君に見せませう。……壇を降りませうか。下りてもよろしいんですか。

市民等 お下りなさい。

二市民 降りたまへ。

三市民 よろしいです。

アントニー壇を下る。

四市民

環形だ。圍繞くんだ。

一市民

柩から離れる。死骸から離れる。

二市民

アントニーさんの道を開けろ。どうも實に偉いアントニ

ーさん。

アント

これ、さう押しては不可。ずつと離れて下さい。

市民等

退れ！ 開けろ！ 退れ〜！

アント

諸君に若し涙があるなら、今こそ流す準備をなさい。…諸

君はいづれもこの外套を御存じであらう。予はシーザーが始

めてこれを着用した日を覚えてゐる。それは或夏の夕方、敵

ネルヴィイ族を征伐して大勝利を得たその日に、陣營中で被た

のであつた。御覽なさい、これ此處をカシヤスの短劍が刺し貫

御覽なさい、これ此處をカシヤ

スの短劍が刺し貫いたのだ。御覽なさい、奸賊カスカメが、どんなに斬つたか。此處をば子のやうに愛せられてゐたブルータスが突き通いたのだ。

おのが外套で面を掩うて、ポン

いたのだ。御覽なさい、奸賊カスカメがどんなに斬つたか。此處をば子のやうに愛せられてゐたブルータスが突き通いたのだ。すなはち彼れがその惡むべき刃を抜き取つたその途端に、御覽なさい、シーザーの鮮血がその後を追つて、さながら人が戸口から走り出るやうに流れ出たのを。今無慚な叩き方をしたのは、よもやブルータスではあるまいかと、見定めんとしたかのやうに。何故なれば、ブルータスは、諸君も御存じの通り、シーザーの守神同様であつたからです。如何に深くシーザーが彼れを愛してゐたかは、お、神々よ、あなたがたが御承知の事だ！これこそ最も残忍無慈悲な切口であつたのだ。流石の大シーザーもブルータスが自己を刺すを見ては、――謀反人の力よりも遙かに怖ろしい彼れが恩知らずの振舞を見ては、――流石の大勇氣も打ち挫かれ、おのが外套で面を掩うて、ポンペイの像の

ペイの像の脚下にすらも、大シーザーは倒れたのだ、血汐は泉とながる、間に。

脚下にすらも、大シーザーは倒れたのだ、血汐は泉とながる、間に。おゝ！ 國人よ同胞よ、シーザーが倒れたのは國が倒れたのも同様です。それと同時に自分も、諸君も、吾々悉くが倒れたのだ。而して残忍無慚の叛逆人等は、倒れた吾々を眼下に見下いて、凱歌を奏し勝ち誇つた。おゝ！ 今こそ諸君は泣く。して見ると、さすがに惻隱の感に堪へられんと見える。あゝその涙こそは恩を知り義を知る涙だ。やあ！ 諸君、これは只だシーザーの外套に傷が附いたに過ぎない。然るに諸君は之れを見てさへもお泣きなさるか？ さ、これを御覽なさい。これが本人です。これ此の通り謀反人どもに切りさいなまれた本人です。

一市民 おゝ氣の毒な有様ぢや！

二市民 おゝ偉い偉いシーザーどのを！

三市民 おゝ情ないことぢや！

四市民 おゝ謀反人めら！ 悪黨めら！

一市民 おゝ無慚な無慚な有様！

二市民 復讐をしよう。

市民等 復讐をしよう！……出かけろ！……捜せ！……殺せ！……

謀反人めらは一人でも生かしておくな。

アント お待ちなさい、お待ちなさい。

一市民 シッ！ アントニーさんが何か言つてゐる。

二市民 おい、あの仁の言ふことを聽かう、あの仁に従いて行かう、あの仁と一しよに死なう。

アント 深切なる諸君、親友諸君よ。自分の申したことが原因となつて、諸君がさう妄りに唐突に暴舉に及ばれるやうなことがあつてはなりません。今度の事を行つた人達は、いづれも公明正

今度の事を行つた人達は、何れ

も公明正大な人
人でありませ
ともかくも彼等
は賢明でもあ
り、また公明正
大でもあるか
ら、無論諸君に
對して道理らし
い辯解をせらる
るであらう。親
友諸君よ、自分
は諸君の心を盜
まうとして來た
のではない。

大な人々であります。如何なる私怨、私憤があつて、嗚呼！ か
やうな事を敢てせられたか、それは自分の知る所でない。とも
かくも彼等は賢明でもあり、また公明正大でもあるから、無論諸
君に對して、道理らしい辯解をせらるゝであらう。親友諸君よ、
自分は諸君の心を盜まうとして來たのではない。自分はブル
ータスのやうな雄辯家ではない。否、諸君の豫て御存じの通り
の、質樸な、木訥な、只だ友を愛するだけの男である。それをまた
彼等が知つてをればこそ、シーザーの爲めに公けに演説するこ
とをも許したのである。無論予は才智もなければ、文字もなく、
徳もなく、身振、手眞似も下手なれば、表白法も知らず、辯舌も拙く、
とても人の血を攪亂するやうな力は無い。予は只だ眞直に辯
じ得るのみである。諸君の知つてをらるゝ事實そのまゝを諸
君に話して、懐かしいシーザーの傷口を、——哀れな、無慚な、物を

ローマ街頭の石
をすらも奮起せ
しめる。

言ひ得ない口を——諸君に見せて、予がその口に代はつて語つ
たまでである。が、若し予がブルータスで、ブルータスが予であ
つたならば、必ずや諸君の心を攪亂して、ローマ街頭の石をすら
も奮起せしめ、忽ち暴動を起こさすやうな雄辯を、シーザーの一
つゝの傷口から發せしめたであらうものを。

市民甲 暴動を起こさう。

市民乙 ブルータスの家を焼いてくれう。

市民丙 ぢやあ、出掛けろ！ さあ、徒黨の奴等を搜し出せ。

アント まあ、お聴きなさい、諸君。 まあ、私の言ふことをお聴きなさい。
い。

市民等 シッ／＼！……聴け／＼、アントニーさんの言ふ事を……
えらいもんだなあアントニーさんは。

アント 諸君よ、君がたは理由をよう承知しないで事をしようとし

てをられる。シーザーは何故にそれほどまでに諸君に愛慕せらるべきであるか、御存じか？ あゝ！ 諸君は御存じてない。然らばそれを改めてお話しせねばならん。諸君は先刻申した遺言状の事をお忘れなすつたのだ。

市民等 さうく！ 遺言状！ 諸君待つたり、遺言状を聴かうよ。

アント これがシーザーの捺印を経た遺言状です。シーザーはロ

ーマ市民各自へ、一人々々へ、七十五ドラクマを與へまする。

二市民 實にどうも立派な人だシーザーは！ 復讐をしよう。

三市民 どうも實に豪儀な人だなあ、シーザーは！

アント 静かにして聽いて下さい。

市民等 シック！

アント 尙ほその上に彼れは自分の遊歩地を悉く諸君に譲りました。即ち彼れの私有に屬する各處の涼亭をはじめ、近頃新に樹

木を植ゑ附けさせたタイバア河の此方岸の各處の庭園をば、諸君及び諸君の子孫に、永久に譲り渡いて、諸君をして其處で享樂せしめ、自由に逍遙せしめ、疲勞を慰めしめんことを望んでゐる。シーザーは斯ういふ人であつた！ 何時又斯くの如き人が來るであらうか。

一市民 もう決して來ん、もう決して……さあ、出掛けろく！

齋場へ往つて、遺骸を火葬にして、それからその燃えさしを炬にして謀反人どもの家を焼かう……死骸を持ち上げろ、死骸を。

二市民 さ、火を取つて來い、火を。

三市民 腰掛をぶつ倒せ。

四市民 長床几をぶつ倒せ、窓を毀せ、何もかも叩き毀せ。

死骸を携へて市民等皆入る。

アント 思ふ壺だ……あとは如何ならうとも、此方の關ふこつちや

思ふ壺だ。

ない。

〔ジュリヤス、ジーザー〕

一八 狭き國は廣く、峻しき國は平けく

祈年祭
年穀の豊熟を神
神に祈る詞。
延喜式
貞觀十一年より
延喜七年までの
諸式を、藤原時
平等が勅を奉じ
て撰したもの。
五十卷。

「祈年祭」は『延喜式』の中に跡をとゞめた三十篇足らずの古祝詞の中、最も名高いものの一つで、殊にこゝに引く一節は、多くの學者から、日本民族が生具した本來の使命抱負を道破した大文章と視られ、或る少數の熱心家からは、東西古今に通じて、天地間第一の文章とも視られて居るものである。それは伊勢にまします天照大御神の神徳をたゞへて、年穀の豊熟を祈つたもので、

辭別きて伊勢に座す天照大御神の大前に白さく、皇神の見霽かします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜坐向伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の

艦の至り留まる極み、大海に舟満てつゞけて、陸より住く道は、荷の結縛ひ堅めて、磐根木根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限り、長道間なく立てつゞけて、狭き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打ち掛けて引き寄する事の如く、皇大御神の寄さし奉りたまへば、荷前は皇大御神の大前に、横山の如打ち積み置きて、残りをば平けく聞食し、また皇御孫の命の御世を、手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸へ奉る故に、皇吾が陸神漏伎神漏彌命と、鶉じもの頸根衝き抜きて、皇御孫命の珍の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。

この名古典の大意を現代語に譯すると、かういふ事であらう。
辭を改めて、伊勢に鎮まり坐す天照大御神の大前に申上ぐる事は、大御神の遙かに見そなはず四方の國々は、天の蔽ふ限り、地のつゞく限り、高くは青空が遙かに棚引き亘つて居る限り、

低くは白い雲が大地に向つて覆さつて居る限り、青々とつゞく大海の方面では、棹舵を乾さずに漕ぎ進んで、もう進めぬといふ行止りまで、海面一ぱいに隙間もなく船を浮かべ、地つきに行く方面では、馬の背の荷をゆひ堅めて、岩が根木の根を踏み凹まして、馬の爪がもう利かぬといふ所まで、長い道中隙間もなく駄馬の列を立てつゞけて、せまこましい小國は廣々と取りひろげ、險阻な不安な國をば平和安穩の國となし、そして王化に潤はぬ遠國をば、八十筋百筋の太綱を打ち掛けて引き寄せるやうに、大御神が御寄せ下さるので、此の御蔭によつて、國々から納め奉る農産物の初穂の荷をば、大御神の御前に、山のやうに堆く供へ奉つて、其の残りもば、天皇が御心安く召食ふことが出来まする。又この御蔭によつて、大御神の御子孫たる御代々の天皇の御代をば、常磐に堅磐に動くことなき

長久の御代と祝うて、赫々たる隆運を拜し奉ることが出来るので、天皇御親ら懐かしく尊く思召す皇祖の男神女神の命達よ、其の命達の代表とも見奉るべき天照大御神よ、願はくは御受納ましますと、水にくゞる鶉のやうに額づきぬかづいて、皇孫天皇の獻らせ給ふ珍らしき御供物をそなへ、神徳を頌へて、かくは年穀豊熟の御加護を祈るのであります。

といふのであらう。

いかにも蒼古樸茂なる言句の中に、宏遠雄大正々堂々たる抱負を言ひ現はしたもので、之れを國民永久の理想とするに異論はなく、また古來の國學者が與へた解釋にも、大體に於いて異論はないが、唯だ一つ不審に思はれるのは、青海原は棹舵干さずから、長道間なく立てつゞけて、までの數句の意義をば、朝貢の船舶駄馬の連續する事と取るべきか、或は皇化を普及し、民禍を刈除し、理想を弘布

蒼古樸茂。
宏遠雄大。

皇化を普及し、
民禍を刈除し、
理想を弘布す。

來るにあらずし
て行くなり。

する、我が宣傳使の海陸兩路に於ける行列と見るべきかといふ點である。從來は加茂眞淵が『祝祠解』や『祝祠考』に、海路陸路より貢ぎ奉るをいふと解いたのを始めとして、鈴木重胤の『祝祠講義』から現代の學者諸氏の多くの著述に至るまで、悉く此の意味に取られて居るが、思ふに是れは朝貢の船や馬が、遠近の領國から來る事ではなくして、多分皇化宣傳使が、勢揃ひして出かけて行くことであらう。向うから來るのではなくして、此方から往くのであればこそ、舟の艫の至り、留まる極み、馬の爪の至り、留る限りとは云つたのであらう。「陸より來る道」と云はずして「陸より往く道」とは云つたのであらう。また船を滿てつゞけ、馬を立てつゞけて、狭き國を廣くし、峻しき國を平かにすると言ひつゞくる以上は、どうしても一種の理想を持つ團體の積極的遠征を意味すべき筈で、小弱國が叩頭して強大國の主權者に奉る朝貢の船や馬に取つて、狭き國を廣

御土産を貰ふ事
か、贈物を與へ
る事か。

くし、峻しき國を平けくするといふのは、何の意義をも成さぬ事である。かたゞ、是れは、どうしても、皇化宣傳使が仁義平和の大道を高く掲げて、有形的には狭き國、險阻な國を平坦にし、精神的には惡政惡俗によつて民を苦しめる國を化して道ある國とする、といふ意味に取るべきであらう。而してかやうな事は、一見、文法や古文辭に囚はれた好事家の暇つぶしのやうにも見えるが、建國當初に國民の大理想の宣せられた偉大なる文章の意味を、左と解くべきか、右と解くべきか、消極的に解釋すべきか、積極的に解釋すべきか、坐つて居て御土産を貰ふ事と取るべきか、難路を切り開き切り拓いて、尊い贈物を憐れな人達に與へる事と取るべきかは、國民として決して輕視し小視すべき事ではないのである。

此の解釋に對し、或は神代上代の事實を思ひ比べて、不妥當と思ふ人があるかも知れぬ。けれども此の點に關しては、朝貢説の方

實現を豫期せられたる主觀的事實なり。

も全く同じことで、要するに是れは原始時代に於ける吾等の祖先の頭に描かれた理想の現はれと見るべきであらう。針小棒大に寫し出だされた誇張ではあるが、同時にうぶな心に實現を豫期せられた主觀的事實と見るべきであらう。而して此の見方を以てすれば、遠くは伊邪那岐命が天照大御神に高天原を知らせと言ひ、月讀命に夜之食國を知らせといひ、須佐之男命に海原を知らせと言はれたのも、宇受賣命が海中の魚族に對して、新に降臨された皇孫に隨ふか否かと問うたのも、大國主命や倭建命が山河を跋涉しての功業も、四道將軍の派遣も、神功皇后の朝に、斯摩宿禰を遠く卓淳國に遣はされたのも、皆一種の皇化宣傳と見るべきであらう。公文書的の傍證としては、崇神天皇の十年に、四道將軍を派遣される時に下された詔勅なる、

民を導く本は教へ化くるにあり。今既に神祇を禮ひて災害

皆耗きぬ。然れども遠荒の人ども、猶ほ正朔を受けず。是れ未だ王化に習はざればか。それ群卿たちを選びて、四方に遣はして、朕が憲を知らしめよ。

の如きは、此の祝詞に現はれた積極的風化主義、仁義的帝國主義の史的實在を裏書するものであらう。殊に昭和の現代に生を享けた吾々が、眼のあたりに見ることを得たる滿洲國の創立は、神代以來の此の國民的理想を現代化して、最も偉大に、最も痛快に實現したものであらう。

一九銀の猫

上田秋成

文治その年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣

積極的風化主義
仁義的帝國主義

滿洲國創立の史的意義

上田秋成
江戸時代の國學者、小説家
大阪の人
文化六年歿
年七十八

文治

後鳥羽天皇御宇
の年號

鎌倉の大將殿

源頼朝

渚に遊ぶ蘆鶴の
歩して、疾から
ず遅からず、列
を亂さず練りい
でさせ給へり。

雲水に在處定め
ず侍る者にて名
は圓位と申す。

てさせ給ふ。例の事にて御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕
うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩して、疾からず遅からず、列を亂さず
練りいでさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏み奉る人數多あるに、
警衛して「あな」とだに言はせず、世にいかめしく尊き御有様なり。
かへりまをしして、御手輿に召させ給ふ程さとき御眈に見とゞ
めさせ給ひ、御階の忌垣の許に畏まり居る法師のあるが、見上げ奉
る面つき、旅に飢ゑて、いと瘦せ黒みづきたるに、衣、杖、笠なども乞食
者の様したるが、目を偷みてうずすまりをる、なほ人ならずや思し
けん、「あの法師が修行するやう、名をも問へ」と仰せたらうぶ。御興添
の若侍急ぎ走り寄りて、「有難く御目賜へり。何處よりの修行ぞ。
名をも申せよ」といふ。不意に驚きざまして、雲水に在處定めず侍
る者にて、名は圓位と申す」といふ。聞し召されて、さればこそ聞き
知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ひならで、賢き人得たる例に、誘ひ

歸らん。わが後につきて來れといへ」とて、召連れさせ給へり。
御館に入らせ、御装束改めさせ給へば、やがておほとなぶら數多
照らしかゝげたり。「けふの道行づと將て」と仰せたらうぶ。「法師
まゐれ」とて、御座近き一間なる所の簀子に召されたり。大將殿見

虫の聲花も色ある
初秋の夜よしやこ
よひ月の遊びせむ
無腸

昔は藐姑射の山
の御宮仕せし人
の、世をはかな
きものに思ひし
みて、身は黒く
やつしたれど、
月花の歎きの譽
れは物の心なき
あづま人さへ聞
き知りたるぞ。
八百日ゆく濱の
眞砂の中には、

おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきも
のに思ひしみて、身は黒くやつしたれど、月花の歎きの譽れは物の
心なきあづま人さへ聞き知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中
には、玉とて拾ひ收めたらんを、語りて聞かせよ」と仰せたらうぶ。い
みじく畏まりて、思ひかけず大木の御蔭に参り侍れば、いともかゞ

蹟筆成秋田上

玉とて拾ひ收め
たらんを語りて
聞かせよ。

大空に羽うちつ
けて飛ぶ鶴の
聲、霜枯の淺茅
が下の蟲の音、
いかで取りなめ
て聞こゆべき。

やかしきにぞ、たゞ夢路をたどるやうに侍りて、聞こえ奉るべき事も侍らず。さとき御眼に見現はされて侍ること、いと難有けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひ侍れど、かひあることも打ち出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍り。大空に羽打ちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞こゆべき。あな畏しと申す。
うち笑ませ給ひ、弓取りし人のもとの心の猛きには、詠む歌も直ぐ明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には、詠み移すまじきものに、宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出で立ちて、笛鼓の音、馬の嘶きは物とも思はぬを、この三十文字餘りの學には心の後るゝはいかに。「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。

大風起こり：
漢の高祖の作

鳥鵲南に
魏の曹操の作

古の代々の帝は、馬に鞍おき御弓矢取らして御軍には立たせ給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直々しく、調もいと高しとこそ打ち聞き侍れ。いでや歌よまんとては、ますらを心を取り隠し、あてになよびかにかのみ詠み移すべくするこそ、この道のいみじき煩ひなれ。君がさとく猛き御心の儘に打ちまねばせ給はんには、今の世の人、誰れかは並びあへ奉らん。三尺の劔を取りて、大風起こり雲飛揚す。」と歌ひ、槊を横たへて「鳥鵲南に。」と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじきを磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、いづれの業にも、初めより優れたらんはかたくこそ侍らぬ。」といふ。
「人々あれ聴き給へ。世は捨て遁れても、たのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手とな

ん聞こゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと思ひしみぬる事は忘れずてぞあらん。一言にても承らばや。「こは益、恐れある御問はせなり。御物語のはてくは、武士の道しばしも怠らせ



源朝頼朝 塑像

給はぬ御心より、野山を住所の瘦法師にだに物問はせ給ふことの忝さよ。向ひ奉りては、をこがましく、何をか家の傳へなりなどとして聞こえ奉るべき。まして難有き大宮仕を否み奉り、親たちの慈みをさへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出でたるいたづらものの、弦ひき一つだに心にとめし事も侍らず。たゞ一言の忘れ難きは、賞を重くし罰を軽くせよ。といひしと、任ずるものを辱しむれば危し。といひし難有さ

病める士卒の痘をすふ。
周代の兵法家呉起の故事

よ。士卒の痘を病めるを吸ひしは、人の心をよく買ひなすといへども、眞の情よりも覺え侍らず。竈を滅らして人を危きに陥るは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき君の御心にあらず。軍を出だし給へる事の怪しきまで賢くましまするを、餘所ながら見聞き奉るには、この方の御問ひ、免させ給へ。とて、額を板敷に擦りつけて申す。



西行法師 木像

君笑みほこらせ給ひ、口とく、心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今ははたしてん。人々と土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まればとは酒飲まざるべし。鹿猿の中に立ち交りて歌詠めといふとも、詠むまじ。たゞ我が前にて遊べ。風ひや、かなるにも、飽か

ず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は暖かにもこそ。この火取法師に參らせよ。とて、白がねもて作りたる、猫の形したるを取り傳へて、君より賜はる。とて、前に置きたり。鹿猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ瘦法師がためには、似つかはしき御賜ぞ。とて、三度押し戴きぬ。あした御暇賜はりて立ち出づるに、御館の人やどりに、誰殿の童ならん、括袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、これ取らせん、火埋みて手足あたゝめよ。とて、かのきら／＼し



き物を與へて、顧みもせず立ちぬ。童うち驚き、これ見たまへ、見も知らぬ法師の見も知らぬもの賜ひつるは。とて、青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶

物を、誰れかは得させん。拾ひやしつる。といふ。「さらに／＼、道のそらにかゝるものやはあるべき。あな恐ろし、殿に奉りて給へ。」といふ。やがて御館にもて參り、仕ふる君を呼び出で、しか／＼の事なんと申す。「いと怪し。大將殿の法師にたまひしを、いかで童には得させけん。訝し。とて、まづ急ぎて聞こえ奉る。君うち笑み給ひ、かの似而非法師、あなづらはしく幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん、わが門の前に捨てゆきつるよ。一度穢れしもの、その童に取らせよ。とて、取りおろさせ給ひぬ。

西行後にこの事を人に語りていふ、右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはずぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、我が佛の冥福といふことを生まれ得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やう／＼衰へさせ給はん世の姿なるは。と

口に蜜し給へど、心には針のおはずらん。

て、涙とぐめ難くして物がたりしとなり。心なき身にも、これを聞き傳へては、秋の夕暮ならずとも、うち擧みぬべし。〔藤篋冊子〕

二〇 唐船の前の實朝

坪内逍遙

坪内逍遙
文學者
文學博士
名は雄藏
名古屋の人
安政六年生

見渡す限り、前の方一面(平舞臺全部)は小壺の沖中の心。正面に見ゆる陸地(背景)は、小壺の沖中より遙かに由比が濱邊を見やりたる體にて、上手のずつと前寄りには磯馴れひよる松を幾株となく戴きたる飯島が崎が、間近く黒々と突き出でてをり、其の奥、今の豆腐川あたりの處には多くの漁家が朧げに見え、篝火處々に燃え、そこに、前の場の唐船の輪廓が——二本の帆柱には夥しく唐風の旗を翻し、無數の唐燈籠を吊したれど——距離遠ければ黒々と見え、それより更に奥の方は、正面の中央へかけて、鎌倉材木座附近の港口の體にて、數百艘の舟ども、大津の浦の如くに集ひ、又それよりも奥の方には、千萬宇の宅、軒を並べて、大淀のわ

夜目にもいちじ
るしく。

夜色蒼茫たる相
模灘。

たりに異ならざる様、其の家々の燈火と月の光りとにて、おぼろげながら見え、それより更に下手へかけては、人家は次第に疎らであるらしく見ゆれど、砂濱の廣々としたる體、夜目にもいちじるしく、滑川、稻瀬川などの川口も、冴えたる月光にて銀色に光つて見え、尙ほ其の下手には稲村が崎が臥したる牛などのやうに突き出で、又其の奥には江の島も見え、それより下手には夜色蒼茫たる相模灘。風は悉く和ぎ盡くして、海面はまるで青壘を敷き連ねたるやう。冴えに冴えたる月は、もう大分西の方へ移り、今はずつと下手の空にて照つてゐる。飯島が崎の岩々には、銀波が靜かに打ち寄せてゐるのが見える。引汐らしい靜かな浪の音に遠く唐船の上にて奏しつゞくる慈尊萬秋樂の限りもなく、哀愁を帯んだ音色が冠さつて聞こえる。

時は八月十六夜月が出て後二三時間経つた頃。

こゝに沖中に實朝と實阿彌と只だ二人きりを載せたる小艇が漂つてゐる。更に風がなく、浪が無いので、櫓をも櫂をも抛ちて、自然に漂ふまにしてゐたものらしい。が、其の小艇が前記の景中に現はれいで

た途端は、あはや、實朝が舳先きに立つて、海中に躍り入らんとした刹那である。實阿彌は駭きあわて、今しも後ろから抱きとめてゐる。

和田　こりや何となされますぞ？　あゝ、もし……御前！御前！
どうなされましたぞ？

と實阿彌は、尚ほも振り拂はうとする實朝を、やう／＼のことで抱きとめ、やつと船中に引きすゑて、尚ほ後ろから抱きながら顔を覗き込み、もし、お心が狂はせられましたか？　但しは御本性でござりますか？　或ひは世をはかなませられての御生害か？

トまでは一氣に言つたが、忽ちこらへかねて、はら／＼と落涙し、

御尤もでござります！　御無理とは思ひませぬ。お言葉次第で、わたくしも直にお伴をいたします。強ちお止め申すのはござりませぬ。只だお覺悟遊ばすに先きだち、只だ一言、お別かれのお言葉をば、下しおかれませ。もし！　もし！

惘然として黙つてゐる。

實朝

ト泣きながらいふ。此の間、實朝は惘然として黙つてゐるが、此の時我れに返りたる體にて、しづかに實阿彌を制し、

もうよい、もうよい。……大事ない／＼。手を離せ。
トこれにて實阿彌は、尚ほ不安さうな思入にて、抱いてゐた手を離し、泣きながら油断せず、實朝の様子を見守つてゐる。實朝は十分冷靜の態度に戻つて、

あゝ、ゆるしてくれ。我れながらおぞましい振舞をした。もう決して懸念には及ばん。

靜かに座を改め、とり亂した姿を取りつくろひなどして歎息しつゝ、船に乗るまでも、乗つてからも、決してこんな氣はなかつたのぢやが、今がたの述懐で、われとわが述懐に感動して、はじめて心の酔ひを覺え、つい女々しうなつてゐた處へ、冴え渡るアノ月の光り！　あの靜かな奥深い浪の色！　あゝ、月めがおれを誘ひを

我れながらおぞましい振舞をした。

今がたの述懐でわれとわが述懐に感動して、はじめて心の酔ひを覺え、つい女

女しうなつておた處へ、冴え渡るアノ月の光り！あの静かな奥深い浪の色！あゝ、月めがおれを誘ひをつたのぢや。

つたのぢや。魂がふとあこがれ出ようとしたのぢや。…さぞ驚いたであらう。堪忍してくれい。…

トこれにて實阿彌はやゝ安心の思入。されど尙ほ愁然として頭を垂れてゐる。

これを思ふと、いつぞやのアノ狂女が、月の佳い晩になると、龍宮へ往くというて、ともすれば、浪間へ入らうとするとやら聞いたが、成程、無理もないわい！

トこれにて實阿彌は、感慨に堪へかねたる思入にて、

和田 御述懐の餘りとは申しながら、狂女によそへさせられての其のお言葉は、餘り物體なうござります。源家正嫡の將軍家、日本六十餘州の兵馬の頭領とはお名義ばかり、御政道の大事となつては、何一つお心の儘にはならず、若しまた強ひて御意通りに遊ばさるれば、いづどこから、どんな毒手が下るやも圖られぬお身

の上であるのみか、御母公さまへの御孝心から、たつた一つの御今生のお望みをさへも捨てさせられます。此の世をばあぢ



(板看繪座伎舞歌) 彌阿實と朝實

も忘じます。御前は聰明叡智にましまし、自他を知らせらる

きなうおぼしめします筈。しかしながら、狂女は愚痴無智の極み、何一つ辨へがなければこそ、自他をも顛倒し、前後を

ることが深いゆゑに、それゆゑお身をも捨て、世をも捨てようと遊ばされます。彼女と御前とが、どうして一つになりませうぞ？

ト涙を呑みつゝいふ。

酒色に慰まうとすれば、風雅が否み、和歌蹴鞠に忘れようと思つても、大望めが嘲りをる。血に酔ふことの出來ぬ胸には、不仁を敢てする勇氣もなく、生中

實朝 (しづかに、冷やかに) いや／＼、生中の智慧があつて自他を知るといふことこそ、人間が身の不幸ぢや。よきにつけ、あしきにつけ、其の裏や巢が見えすいて、何事にも、身や心が打ち込まれぬ。おれなぞは、今の世の不具者ぢや。父祖の志を繼ぐことも出来ねば、西行の跡も追へず、蓮生が眞似も出来ぬ。酒色に慰まうとすれば、風雅が否み、和歌蹴鞠に忘れようと思つても、大望めが嘲りをる。血に酔ふことの出來ぬ胸には、不仁を敢てする勇氣もなく、生中の分別が邪魔となつては、佛の道に入ることも叶はぬ。せめても、まだ見ぬ大世界の大自然の中に身を置いて、と天下の

の分別が邪魔となつては、佛の道に入ることも叶はぬ。

周遊を思ひ立つたも、今思へば、これも亦一時の氣休め。大といふも、小といふも、つまりは人間の思ひなしぢや。斯うして小舟にちゞこまつて、濱近う見る月も、あの唐船を千萬里の波濤に浮かべて、大海原で見る月も、本來の光りには變はりのあらう筈もない。もうとうに死んでゐるのぢやと悟つたなら、自ら殺さうとするにも及ばず、未練らしう、さもしらしう味はひ残した行樂を漁らうとするにも及ばぬ。今のおれのおぞましい振舞は、全くの出來心ぢや。もう決して二度とすることではないわい。
トおちついたる調子にていふ。此の以前より艇は、波のまに／＼ゆるやかに漂うてゐる。此の間、實阿彌は始終頭を垂れ、私かに涙を拭うてゐる。

和田 (なほ泣きながら) 御自身のお爲めではなく、天下萬民の爲めをおぼしめされて、一旦はお心を寄せられましたなれど、其の仙洞

不世出の御器量

御所とても、頼もしからず、さなくも、御母公様との御血縁は、切つても切れず。後楯うしろたゑと遊ばさるゝ頼もし人は、一人もないゆゑ、不世出の御器量も、御大望も、行はせられう便宜もなく、只だ一時の物體もない置き物、飾り物となつて、空しう老い朽ちさせられますかと思へば、無念至極でござりまする。せめても、親や兄どもが、輕卒に事を誤らなんだらば、と思ひ出さぬ日とはござりませぬわい！

ト泣く。實朝はいよ／＼落ち着きたる體にて、

實朝 はて、もう歎くには及ばぬ。只今の發作によつて、おれは却つて、此の胸が輕うなつた。もう死なうとも思はねば、生きてゐるのを辛いとも、死ぬるを怖ろしいとも思はぬ。しかしながら、此の不思議な心境に入はまつたも、畢竟はおのしといふ心の友があればこそぢや。生前にさへ、おれの心を知る者はおのしの外には

ないからは、死んだ後におれを正しう傳へてくれる者は、尙ほさ
ら、おのしの外にはあるまい。おのしとおれとは、トいひかけて、一
寸涙聲になつて、身は二つぢやが、心は一つぢや。

トいひつゝ、實阿彌の手を握りしめる。實阿彌は、何もえいはず、聲を放
つて泣く。此の間、艇は、尙ほ浪のまに／＼、漂うてゐる。萬秋樂の哀音
はつゞいてゐる。

長谷寺邊のらしい梵鐘の音が、陸の方から聞こえて来る。

ト下手より、二人が乗つてゐる小艇の前へ、一人の女の溺死體が流れて
来る。これは例の狂女の死骸なのである。衣類は以前のまゝにて仰
向けになり、笑ひ顔をしたまゝで、ゆるく靜かに漂うて来る。實朝は、此
の間、どこを詠めるともなく海面を見てゐたが、忽ちこれに目をとゞめ
やがて口早に、

實朝

實阿彌！ 實阿彌！

ト呼ぶ。泣き伏してゐた實阿彌は、急ぎ涙を押し拭ひながら、

和田 はッ。

ト顔をあげる。此の時死骸は、すぐ舷の傍らを、上手へと流れる。

實朝 あれを見い。あれは、たしかに、此間の物狂ひぢや。衣類に見
覚えがある。水死しをつたものと見ゆる。…止めい。早う止
めい。

トこれにて實阿彌は、急ぎ權を取つて艇を進め、既に一間餘も流れ過ぎ
たる死骸に追ひつきて、權にて之れをおさへ、忽ち舷へ引き寄せせる。

和田 成程、仰せの如く、あの狂女めにござります。衣類もあの時の
まゝでござります。ともかくも引き上げまして、水を吐かせま
せう。

ト既に死骸に手をかけようとする。實朝止めて、

實朝 いや〜、まて〜。(じつと死骸を見て)とうに緯切れたと見ゆ
るのに、あゝ、さも嬉しきさうな此の笑み顔。龍宮へ到り着いたと

でも思うてゐるのか？(ト暫らく詠めてゐて)あゝ、逆も助かりさ
うにもないわい。

和田 ではござりまするが、このまゝに押し流しますのも酷いやう
に存ぜられます。

實朝 いや〜。我れに返らせたなら、酷いやい。…流してやれ、流し
てやれ。

トこれにて實阿彌權の手をゆるめる。死骸は波のまに〜上手へと
流れつゝ、やがて見えなくなる。實朝立ち身にて、じつと其の行くへを見
送る。實阿彌も宜しく思入あつて、徐かに權を取り直す。

淋しく悲しき萬秋樂は尙ほつゞいてゐる。
月はます〜牙を渡つてゐる。(幕)

(『名残の星月夜』)

二一 山家と金槐

西行法師

鎌倉時代の歌僧
俗名佐藤義清
建久元年歿
年七十三

一 山家集より

西行法師

よし野山花の梢を見し日より

心は身にもそはずなりにき

あくがるゝ心はさても山櫻

散りなん後や身にかへるべき

花に染む心のいかで残りけん

捨てはてにきと思ふ我が身に

願はくは花の下にて春死なん

その如月のもちづきのころ

行方なく月に心のすみくゝて

果てはいかにならんとすらん

四番 左持

雨中野草
春さめのふりそ
めしより野邊見
ればふか緑にも
なりにけるかな
右
しめくゝと色ま
すあめの降りそ
へば深緑なる野
べ草かな。

雨中野草

春さめのふりそめしより野邊見ればふか緑にもなりにけるかな

しめくゝと色ますあめの降りそへば深緑なる野べ草かな

西行法師筆蹟

まこととも誰れか思はんひとり居て

後にこよひの月をかたらば

古を何につけてか思ひ出でん

月さへかはる世ならましかば

捨つとならば憂世を厭ふしるしあらん

我れにはくもれ秋の夜の月

いつの世に長きねむりの夢さめて

おどろくことのあらんとすらん

二 金槐集より

源 實 朝

源實朝
鎌倉三代將軍
右大臣
承久元年歿
年二十八

もののふの矢並つくろふ籠手の上に

霰たばしる那須のしの原

吹く風の涼しくもあるかおのづから

山の蟬鳴いて秋は來にけり

高望の涼流清く備はれ

不向在事可竹類和事云は

務乃真朝在事云云可竹類

河知非飲地乃古あ初い河角

可竹や仍る涼流清く備はれ

家者河知言乃事術清く河角

東流乃知古むお事類可竹

流知流清く備はれ

高望の涼流清く備はれ

山は裂け海はあせなん世なりとも

君に二心わがあらめやも

大海の磯もとどろによる浪の

われて碎けてさけて散るかも

箱根路をわがこえ來れば伊豆の海や

沖の小島に波のよる見ゆ

源 實 朝 筆 蹟

時によりすぐれば民の嘆きなり

八大龍王雨やめたまへ

現とも夢とも知らぬ世にしあれば

ありとてありと頼むべき身か

二三 茶道の精神 その一

奥田正造

奥田正造
成蹊高等女學校
長

和敬清寂の四字

能和、能敬、能
清、能寂の四綱
領。

茶道の精神を簡単に言ひ現はせば「和敬清寂」の四字に盡きる。この四字が尊重せられつゝ傳はつたことは、貴いことであり、又うれしいことである。この四字を言ひ換へると、能和、能敬、能清、能寂の四綱領となる。

人相我相に役せられ、知るにおごり知らざるを辱しむる様な人は、人として人に交はる資格がない。

程子

宋代の哲學者
程明道
元豐八年歿
年五十四

利休

千家流茶道の祖
秀吉に仕ふ
名は宗易
天正十九年自刃
年七十一

和は和合の和、調和の和、和樂の和である。「禮の用は和を貴しとなす。」人相我相に役せられ、知るにおごり知らざるを辱しむるやうな人は、人として人に交はる資格がない。併し如何に和が貴いというても、和だけでは狎れ易い嫌ひがあるので、これを攝するに敬を以てするといふのである。敬とは自己に對して慎み、他人に對して敬ふといふ心持で、程子の所謂主一無適即ち專念である。そしてその形の形にあらはれたものが儀容である。清はいふ迄もなく清潔清廉の清であり、物と心との清であるが、殊に茶器を扱ふ時の清は茶味の第一義である。田舎人が五兩の金を利休に送つて、茶器の購入を乞うた時に、利休は只だ茶筌と茶巾ばかりを送つた。白いきれいな茶巾ですつきりと拭はれ、新しい茶筌で茶が點てられた時、入れた器はたとひ古いかけた茶碗でも、それはもはや、かけ茶碗ではないのである。直接客には見えない水屋の働き、家

兵馬倥傯の間に
得らるゝ僅かの
暇を利用して、
時間を超越した
悠久の自己に悟
入すべく、その
一舉手一投足に
も心のおちつき
を宿すことを要
求する。

庭に於いては臺所勝手元の働きに、若しこの清が缺けてゐたならば、どうして眞實の茶味が出て來よう。以上に加へて心のおちつき、即ち寂が具はる様になれば、もう申分がなくなるのである。本來茶道は、きのふ屈強の若者もけふは戦場の露と消え、高壯の建物も忽ちにして灰燼に歸する、戦國の果敢なくそはくしい時代の氣分に對する鎮靜劑として要求せられ、發達したものであるから、自然に兵馬倥傯の間に得らるゝ僅かの暇を利用して、時間を超越した悠久の自己に悟入すべく、その一舉手一投足にも心のおちつきを宿すことを要求するやうになつたので、これが即ち寂である。この和敬清寂の四字を標的として、各自相應の天地を開く所に、茶道の妙味がある。

以上の四綱領は茶道の大精神である。しかし、よく考へると、これは單に茶室裏に限ることではなく、人生萬般の事、皆この四字で

珠光

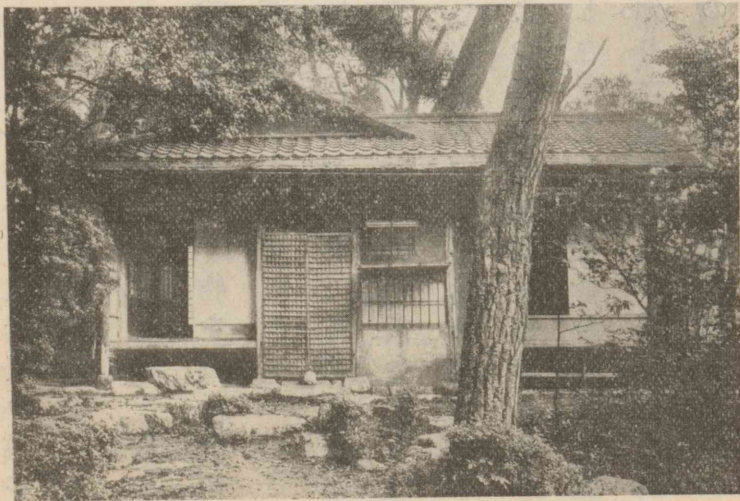
足利時代に於ける
茶道の祖
奈良稱名寺の住
職

茶は遊に非ず、
藝に非ず、又放
樂に非ず、一味
清淨法喜禪悅な
り。

和ぎて流れず、
敬して諂はず、
清くして潔く、
寂にして躁しう
せざれ。

茶は精行儉徳の
人によるし。

律せられる。修行の道場は四疊半でも、活用の舞臺は人生全體に亘り、事々物々、念々刻々に通じて日常生活の準據となるわけである。茶道の徳は實に茲に在る。珠光は義政に答へた言葉の中で、「茶は遊に非ず、藝に非ず、又放樂に非ず、一味清淨法喜禪悅なり」といひ、又「賓主應接の禮、彼此談論の和而もその交水の淡きに似て清遊仙の如し」というてゐる。利休は「和ぎて流れず、敬して諂はず、清くして潔く、寂にして躁しうせざれ」といひ、茶は精行儉徳の人による



醍醐三寶院茶室

し。』というてゐる。この精行儉徳といふ四字は和敬清寂の四字を
姿に現はしたやうなものである。

精行とは、行に精しいといふことで、一々の動作に心がこもるの
意味である。一舉手一投足は勿論、一器を扱ひ一物を動かすにも、
心の奥の鏡にかけて餘裕のある姿をうつすことである。小さい
室をも廣く胖かに住みなし、細く短い茶杓を拭うても、太く長い物
を清むると同じ様なる心を宿し、軽い羽箒を動かしても、おもやか
なる扱ひに心の莊重を表はし、重い水指を運んでも、易々として従
容の心を現はす。是等の習ひによつて、この精行が修練されるの
で、かやうな間に小を小とせず、乏しきを乏しとせざる道念が養は
れ、事々物々に對して、その來由を知り、之れに接して法悦歡喜の情
感謝報恩の念を養ふやうになるのである。一粒の飯、一本のマッ
チも、今わが目前一瞬の用を辨ずる事によつて、この物の一生は終

小を小とせず、
乏しきを乏しと
せざる道念が養
はれる。

誇るべき奢りも
なければ、愧つ
べき不及もな
い。

るなりと觀ずれば、決して之れを輕々しく用ゐる心が起こらぬの
みか、このさゝやかなる物に宿る廣大無邊なる自然の力、天地の恩
に氣がついて、感謝の生活、知足安分の境遇に入らずには居られな
くなる。これが即ち儉徳である。こゝに於いては誇るべき奢り
もなければ、愧づべき不及もない。これ「その位に素して行ひその
外を願はざる」の境であり、知足の法は即ち是れ富樂安穩の處であ
る。和敬清寂の四字に導かれつゝ、精行儉徳の人となる。これが
茶道の修であり證である。

二三 茶道の精神 その二

奥田正造

和敬清寂といひ、清行儉徳といふ、この心身をねる第一歩は感受
性を鋭敏ならしむるに在る。その爲めには、特に或る境地を作つ

て、そこへひき入れ、それにひたらせ、それを味は、しめねばならぬ。これが心の教育であり、茶道の修練である。謂はゆる或る境地とは、云ふまでもなく茶室のことである。細かい所までよく氣づか



京都妙喜庵利休茶室

しめるには、大きい広い散漫な部屋ではいけない。それは起居振舞のために動く微かな風をも感ずる様な小室でなければならぬ。珠光は在來の大きな室を縮め

紹鷗
茶道の大家
利休の師
武野氏
弘治元年歿
年五十三

て、始めて四疊半を作つた。心をねるといふ事に氣づく時、これは尤もなことであつたと思ふ。紹鷗はこの古規に則つて四疊半を作り、更に室内の趣を簡略にして、之れを草の座敷と稱した。利休

は師の紹鷗と相談して更に之れを二疊半に縮小した。これは一面に於いては華麗な書院式の裝飾を適用する餘地のないやう、知足安分の生活を可能ならしめるやうに工夫したのであらうが、心をねるといふ他面から考へても、かくせねばならなかつたのである。

又茶室を普通北向とし、南の光線をさけて幾らか薄暗い室とするのも、この靜の境地を作らんが爲めである。かゝる工夫によつて作り上げられた室内で心をねるに當たつて、最も都合よく又最も重き役目をなすものは、かすかなる感じである。靜かなる境地に於いて眼耳鼻舌身意六根の微妙なる活動が營まるゝ時、心の世界の未だ嘗て開かれなかつた部分の門が開かれる。耳の力が最も強い。主人は客の一舉一動から出る音に心の耳をすまし、客は主人の働きから出る音に心の耳を洗ふ。されば茶に

靜かなる境地に
眼耳鼻舌身意六
根の微妙なる
活動が營まるゝ
時、心の世界の
未だ嘗て開かれ
なかつた部分の
門が開かれる。

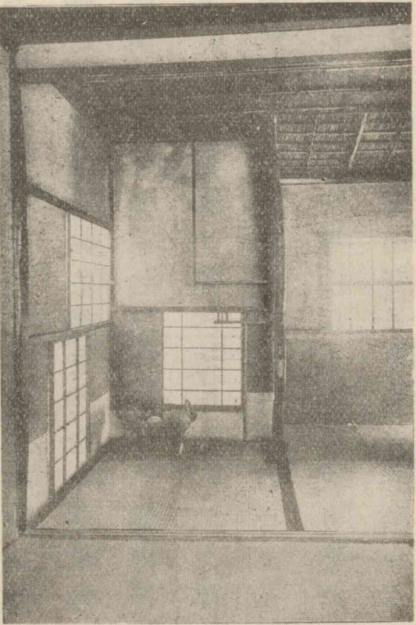
かしがましくな
きやうに、又さ
し足するやうに
もなく、おだや
かに無心なるが
功者と知るべ
し。得道の人な
らでは批判し難
し。

は種々の響がある。來着の旨を報ずる板はの音は、客が主人の心に
ひゝかす第一の響である。之れを聞いた主人が出て迎ふるに方
つて、手水鉢の水を改めんとて、さつとうつす水の音は、馳走の最初
の響である。露地の飛石を渡れば下駄の響がする。南坊録に「露
地の出入に下駄はくこと紹鷗以來の定めなり、草木の露深き所を
往來する故此くの如し、樂に杳の音功者不功者をきゝ知る」といひ、
又「かしがましくなきやうに、又さし足するやうにもなく、おだやか
に無心なるが功者と知るべし。得道の人ならでは批判し難し」と
いうてある。かうなると下駄の音も中々むつかしくなる。併し
これも亦照顧脚下の一で、之れによつて、足元に心を置く良習も自
ら養はれる。つくばひで手水を使ふ音の清々しさと、手を洗ひ終
はつて立ち上がる時に出る下駄の音とは、次客への合圖となるの
で、只だ單に主人へ響かせる丈ではない。やがて席入りの爲めに

主人が手前の間
に工夫して出す
種々の響は、皆
自然を偲ばせて
かすかなる音
に、深い意味を
添へてゐる。即
ち茶碗に汲み入
れる水の音を
寛の音にかよは
せ、茶釜に谷
川のせゝらぎを
偲ばせ、賤山が
つの斧の音をひ
ゝかす等、山里
の趣を取り集め
て、靜境に幽趣
を添へる。

戸の音がする。疊ざはりの音はその人の品位を偲ばせ、更に客自
身の心をも落ち付かせる。客一同が入席し終はるまで、その動作
から出る響がつゞいて主人の心に通ふので、水屋に端坐して之れ
を聞けば、壁をへだて、客の一姿一態を心に見るのみならず、その
響によつて客の心持までをも察することが出来る。又主人が手
前の間に工夫して出す種々の響は、皆自然を偲ばせて、かすかなる
音に深い意味を添へてゐる。即ち茶碗に汲み入れる水の音を寛
の音にかよはせ、茶釜に谷川のせゝらぎを偲ばせ、賤山がつの斧の
音をひゝかす等、山里の趣を取り集めて、靜境に幽趣を添へる。
これ等の響の背景として、終始一貫するものは釜の湯の煮える
音である。通常之れを松風というてゐる。この松風は樂音と違
ひ、旋律の影響を受けてゐないので、靜寂の興趣を一層深からしめ、
落ちついて聞いてゐると、心を大森林の奥、大幽谷の底までも持つ

て行つてしまふやうな心地がする。太古の如き静けさの内に、その幽趣を増すものは、松韻と谿聲とである。之れを四疊半裡にうつしてこの趣を偲ばしむるは、實に茶境の力である。



室茶寺仁建都京

かく心耳を澄まし來たれば、微かなる感じは唯だ、微かなる感じではなくなつて、その微かなる感じの彼方に續ける、大きなる重き意義の世界が開けてくる。經に

奕堂

曹洞宗管長
明治十二年寂

「觀其音聲皆得解脫」とある、所謂觀音の妙境とは即ち是れである。奕堂和尚は曹洞宗近世の名僧であつたが、一日殷々とひびく曉鐘に心耳をすまし、禪定から起つて侍僧を召し、鐘つく者の誰れな

森田悟由
曹洞宗管長
大正四年寂
年八十二

るかを見させた。侍僧はそれが新參の一小沙彌である旨を報じた。そこで奕堂和尚はその小沙彌を膝下に招いて、今曉の鐘は如何なる心持で撞いたか」と尋ねられた。沙彌は別にこれといふ心もなく、只だ鐘をついたばかりであります」と答へたので、いやさうではあるまい、何か心に思うてゐたであらう、鐘つかばかくこそ。誠に貴い響であつたぞ」と云はれて、別にこれといふ心得も御座りませぬが、只だ國許に居つた時、師匠が鐘をつかば鐘を佛と心得て、それに添ふだけの心の慎みを忘れるなど、常々戒めて下されまして、それを思ひ浮かべて、鐘を佛と敬ひ、禮拜しつゝ、ついたばかりでござります」と答へた。奕堂和尚はしみじみその心掛に感じ、終生萬事につけて今朝の心を忘れるなよ」と戒められたといふ。この小沙彌こそは後年の森田悟由大禪師であつたのである。朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさへ、かほどまで敬虔の念ひを罩め

た古人の心づかひはいかにもたふといものではないか。已に音によつて心が澄み渡つて來ると、心の窓である眼には眞の趣がうつる。曉の露地では幽かなる殘燈が心を照らす。殘燈に心づけよと教へるのは、露地に配合せられたその光の工合であつて、油皿の置き方や、油の残り加減ではない。秀吉が曉の會に招かれて、露地に入つた時、その侍臣を顧みて、あの殘燈はいかに」と云つた。侍臣は燈火かゝげよといふ思召とあやまつて、火の加減を變へた。之れを見た秀吉は、「はや殘燈の趣失せにけり」と嗟嘆した。悲しいかな侍臣の心の眼が暗かつたのである。

點茶の間主人の姿に變化があると心づき、また手前に序破急の呼吸があると氣がつくまでに、心眼が開けて來ると、心をこめた主人の飾り方、即ちこれに含ませられた意義を、殘る隈なく己が心の鏡にうつすことが出来るやうになり、また一物一體の自らなる位

一物一體の自らなる位置にも心づき、受取つた物は出された様にして返し、拜見の爲め取上げた物は再び元の通りに置く事が知らず識らずの間に出來る様になつて來る。

慇懃の尾籠

置にも心づき、受取つた物は出された様にして返し、拜見の爲め取上げた物は再び元の通りに置く事が、知らず識らずの間に出來る様になつて來る。又主客相對すべき定座に、主位を奪ひ通ひ口をふさいで、慇懃の尾籠を敢てするやうなこともなくなつて來る。

以上視聽の外、更に鼻には香、舌には味と、それ〴〵六根の修練が加はれば、之れによつて養成せられた理智は、ひとり茶味の上に必要ならば、足りなく、また人生其の物を潤澤ならしめる所以のものとなるであらう。

〔茶味〕

二四 我が三大國民道 その一

我が國三千年の思想、文化、歴史は悉く大和魂の現はれてあるが、其の現はれた姿、形の特色について極めて大まかに觀察すると、自

日本三千年の思想、文化、歴史は悉く大和魂の

現はれであるが、自然兒道、公卿道、及び武士道、紳士道の四つに大別される。

然兒道、公卿道、武士道、及び紳士道の四つに別けることが出来る。自然兒道は上古から奈良朝一ぱいに行はれた國民道で、民族が生れながらに具へてゐた持前に従つて行動した時代、儒教や佛教の如き外來の文化は受け入れても、それをば唯だ先進國の御手本文化として崇拜し摸倣した時代の道である。第二の公卿道は、平安朝四百年の間に、藤原氏を中心とした公卿殿上人の間に發達した文化で、感情、文藝に基調を置いた美的生活本位の國民道である。第三の武士道は、種は無論神代の古昔からあつたが、平安朝の半ば頃からぼつ／＼芽を吹き始めて、先づ鎌倉時代になつて物に成り、それから吉野朝、室町を経て江戸に至るまで、いろ／＼に試練され磨きをかけられて、一種の立派な文化、道徳になつたものである。第四の紳士道は、明治の初年に現はれ、段々發達して今日に及んだものである。

吾々は此の四つをば我が國民の歩み來つた四大道であると思ふが、この中最も重要で、最も面白く、又殆んど完全なる程度に發達したものは、公卿道及び武士道の二つである。又明治、大正、昭和の三代にわたつて行はれた紳士道は、此の二つの先行國民道を調和したものであると思ふので、特に此の三大道について大體の考を述べて見たいと思ふ。

平安朝の文化は感情、文藝本位の文化、美的生活の文化で、何でも美しく、快く、面白くと狙つて、ほゞ其の志望の極致に達した文化である。内國外國のあらゆる傳統や影響を採り入れて、集大成的に一種特別の綜合美を成した文化である。その趣の大體は、當時の公卿殿上人や貴婦人の服装を見ても察せられる。かの埴輪土偶に見るやうな姿、聖徳太子の御像などに見るやうな服装から、唐ま

平安朝の文化は感情、文藝本位の文化、美的生活の文化で、ほゞ其の志望の極致に達したものである。

がひの服装を経て、王朝眞盛りの衣冠、束帶、袴、唐衣の盛装に至ると、丁度鳥が雉子、山鳥になつて、それから孔雀、鳳凰になつたやうな趣があるではないか。そしてそれは非常に複雑に重疊累積の曲折を盡くした装ひでありながら、少しも無理がなく、美しく調和して居るではないか。あの時代の文化は、凡てがあゝの通りであつた。一體、あの時代の貴族が、どうしてあのやうな大調和の國民文化を成立たし得たのであらうか。あの時代の先覺者が、其のやうな特殊の理想を掲げて國民を指導した爲めか。或は應神、欽明以來數百年、その間斷えず外國の文化に接して、理解に骨折つたのが報いられて、此の時代に至り、すつかり彼等を咀嚼して我が物にすることが出來たのか。或は京都の美しい自然から受けた影響によつたのか。或は遣唐使が廢せられ、外國文化の輸入が杜絶した爲めに、特殊の文化が成立したのか。其の因縁がいづれであるにせよ、

とにかく平安朝の文化は非常に美しいものであつた。

試みに、人が生れた折の儀式の一つとして、皇子の御産湯を召す御儀を見ると、まづ座敷、装束から萬の器物まで、悉く白づくしに粧ふ。吉方から汲み取つて來た水を沸かして、浴槽ゆばに湛へて、其の中に金銀、寶石、麝香、錢などを浸す。僧正が其の湯に加持をする。湯を召す時には、魔よけの爲めに虎の頭を捧げて、此の百獸を懼伏せしむる獸王の影を湯にうつす者がある。御下賜の御劍を捧げて傍らに控へて居る者がある。其の間に、讀書の博士は孝經、史記を讀む。五位六位の武官は弓を取つて鳴弦なげする。かう舉げて見ると、いかにも日本と支那と天竺と、神と儒と佛と、文と武と俗世間と、あらゆる方面の優れた文化要素を取り入れ、皇子の産湯といふ事象を中心として一つの綜合藝術を成して居るやうではないか。殊に目を驚かすのは、此の時代の服装の美しさであつた。當時

御産湯の御儀に
現はれたる集大成の姿。

當時の服装美に
現はれたる文化
の特色。

は、男も女も、思ひ切つて尾緒の夥しく附いた美装をした。男の装束で最も不思議なのは下襲したの尻しりである。これはもと一尺位引かせるのが普通であつたが、段々華美を競つて、後には數尺になり、一丈になり、一丈二三尺にもなつた。そして簀子すいこを背にして居並ぶ時には、其の尻の尾を欄干に掛けてゐることがあつた。女の装ひの物々しい複雑さは更に甚だしかつた。當時の婦人の美を見る主なる標準の一つは髪かみの長く美しい事であつた。當時の文學に、女の美を稱して、髪かみの長い事を擧げぬものは殆んどない。身丈たゞに餘ること一尺などいふのは、麗人の間に於ける殆んど普通の事であつたが、女の髪かみの美の最頂點を寫したのは、恐らく村上天皇の女御芳子に關する『大鏡』の記事であらう。

内うちへ參り給ふとて御車みくるまに奉り給ひければ、我が御身は乗り給ひけれど、御髪みかみの裾は、母屋の柱のもとにぞおはしける。一筋ひとすぢを檀みちのくに

紙かみにおきけるに、いかにも隙間すきま見え給はずとぞ申し傳へた。める。女の髪かみを長く、美しく、つやゝかにと願つた結果は、遂にこのやうな驚くべく美しい長い髪かみを生むやうになつたのである。

平安朝に於ける女の服装美の頂點を描いたのは、恐らく『榮華物語』に於ける藤原道長の二女妍子が自分並びに召使ふ女房の装束を取揃へた所の記事であらう。こんな風に書いてある。局ろくの女房達が噂うわさをしてゐる。「えらい事ではないか、驚いて取りのぼせてはいけませんよ。」

御覽みかんぜずやはありません。昨日けふ上の御前みまへの取り襲とりねて左衛門さゑもんに着せさせ給ひて御覽みかんぜし程に、左衛門さゑもんえ動かうごかで、すくみて立ちて侍りしは。

御前みまへ様の御装束みまへさまのよすがを取重ねて侍女しよじよの左衛門さゑもんに御着みまへせなされると、重さに堪へかね、動けなくなつて、立ち竦んだといふのである。さすが

に時代の習俗とて、風にも堪へぬ上臈が、この方面には馴れたもので、此の重荷の服装をやすくと立派に着こなしてゐたのだから面白い。また同じ折に、女房達の居並んだ光景を寫しては、

「衣のつま重りて打出したるは、いろ／＼の錦を草子に作りて打着たらんやうなり。重りたる程一尺餘りばかり見えたり。あさましう、おどろ／＼しう、袖口は丸み出でたる程、火桶のさゝやかならんを据ゑたらんと見えたり。」

と書いて居る。裾の端の重つた所は、厚さが一尺餘り、袖口は丸くなつて小さい丸胴の火鉢のやうに見えたといふのである。そして女房の装束は、柳、櫻、山吹、紅梅、萌黄の五種の中から選ませて、一人に三色づつを着せたが、一人の重ねて着た衣の数は十五枚、十八枚から、多きは二十一枚に達したと書いてある。一枚といふは裏つきの袷であるから、二十一枚着たといへば、少なくとも四十二反の

布を身に纏うた事になるのである。「榮華」の作者は此の記事の後に添言して、「これこそは日本國のいみじき大事なりけれ」と書いて居るが、實用、衛生、道德等の點からした觀察は別として、趣味の眼から見ると、此の重疊した複雑さが、時代振に調和した絢爛美の極致を見せて居る所は、誠に日本國の一大事であつたであらう。

是れは女一人の一身に纏ふ装束の事であるが、之れを集團的に見ると、一人の高貴な中心女性は同じ様に美装した數十人の女房童にかしづられて居た。而して是等の女性團は母屋、廂、簀子といふ複雑な三段から成立つ美しい建物の中に住んでゐた。其の室は、まづ格子を以て屋外から隔てられ、其の内部は更に簾、屏風、几帳等を以て三重四重に隔てられて、其の奥に、かしづかるゝ本尊の女性様が、よく奥床しく坐つて居た。而して其の建物は謂はゆる寢殿造りで、寢殿對、屋、泉殿、釣殿などいふ多くの家屋が、釣合の好い形

式に呼應し聯絡して居る、複雑にして而も調和したものであつた。而してまたかやうな建物の内に住む公卿殿上人は、多數の國民の擁護を受けて源平の武人等には身邊の平安を保障され従順な民百姓には豊かな生活費を供給され衣食、事務、會計、戦争等のうるさい事柄には殆んど頭を悩ますことなく、ほしきままに文藝、歌舞、宴樂、戀愛の世界に悠遊してゐたのである。

公卿道文化の形式

かう見ると平安朝の文化、公卿道といふものは實に美しいものであつた。試みに其の形式を撮要して見ると、手は美しい袖口に蔽はれ、身體は美しい長い髪の毛や、重りかさ合つた装束に蔽はれ、人は多くの婢僕隨身に圍まれ、座敷は風流な几帳、簾、屏風に圍まれ、貴族は武人や、僧侶や、藝術家や、民百姓に保護され、感情、文藝の中心趣味は會計、事務、武術、義理、道德等の凡てを従屬させて、其等に圍繞され、

公卿道文化は美しいが、其の缺點は他にみられる事豫想した點にある。

嚴飾され、讚美されるといふ、實に美しく調和したものであつた。

王朝文化の公卿道はこの通り、非常に美しい、而して其の方面から見れば殆んど完全に近いものであつたが、其の缺點をいふと、一方に於いて人にかしづかれる事を豫想した文化であつた。人使用ひの文化、人を踏みつけねば實現することの出来ぬ文化であつた。個人的にいへば、主人が婢僕の人格を無視して使役する事を常道とする文化であり、團體的にいへば、公卿殿上人が武士や民百姓を牛馬の如くに使役し、藤原氏が天子を擁して、公然、平然、他の家々を虐げるといふ文化であつた。

一二の例を擧げて見ると、前にも引いた道長の女妍子は、一人にして女房四十人、童六人、下使六人を使つてゐた。枇杷大納言延光の寡婦は、夫なき身でありながら、三十人ばかりの女房を召使ひ、それらに美裝させて客をもてなさせた。中宮定子に仕へた右近の

内侍といふ女房は、失意の境遇になつた女主人の遠慮されるのを見て、どうして御遠慮遊ばします。主上様が私を御遣はしになりましたのは、唯だ此の右近をば、睦まじく侮らはしき方で、使ひよといふ思召からではありませんか。」と云つてゐる。「侮らはしき」事を、使はるゝ者の特別な資格として、人も薦め自らも誇つて居るのを見ても、當時に於ける被役階級の心理を知ることが出来るであらう。あの王朝の貴族男女の美々しい服装も、つまりは人を使ふこと、人にかしづかるゝことを豫想して、あれまでに發達したのである。

公卿道は美はしいものであつた。しかしながら、人を使役し、人にかしづかるゝ事を豫想する文化、人を踏みつけて他の人格を眼中におかぬ文化、他人を奴僕視、犬馬視、土芥視する事を原則として怪しまぬ道徳は、永く續くべきものではない。果然、平安朝の末期

保元平治の二大亂を境目として、全く面目を新にした反對の道徳、文化が擡頭した。武士道がそれである。

二五 我が二大國民道 その二

武士道の第一義は主君の爲めに一死を分とする所にある。それは「さむらひ」は侍さむらひ者で、本來は主人と頼んだ御方の側に侍して用を足す者といふ義であつたのを見ても明らかであるが、武士道成立期の根本資料を滿載した『吾妻鏡』が、あらゆる徳目の中で、忠君の行爲を最も多く傳へ、又最も強調して褒めて居るのも、一つは此の消息を漏らして居るのであらう。「義貞記」などには、武士たる者が主君と共に居る時は、

「前後左右に心懸け、目を賦はり、只今死なんと思ふべきなり。」

武士道の根本要義は、主君の爲めに一死を分とする所にある。

大道寺友山
武田流の軍學者
名は重祐
山城伏見の人
享保十五年歿
年九十二

といひ、武士道といふ語を始めて用ゐたと云はれる大道寺友山の『武道初心集』には、その冒頭に、

武士たらん者は、正月元日の朝、雑煮の餅を祝ふとて箸を取り初むるより、其の年の大晦日の夕に至るまで、日々夜々死を常に心に當つるを以て、本意の第一と仕り候。死をさへ常に心に當て候へば、忠孝の二つの道にも叶ひ、外の悪事災難をも遁れ、其の身無病息災にして、壽命長久に、剩へ其の人柄までもよろしく罷成り、其の徳多き事に候。と云つて居る。

かやうに武士道は、もと忠君を第一義として、次ぎには其の専門の本領ともいふべき武勇家來としての本分を守るための廉潔質素などを主なる徳目とした、比較的單純な道徳であつたが、其の後禪宗や茶道や儒學等によつて、いろく磨きをかけられ、また鎌

由利八郎
藤原泰衡の臣
頼朝に認められし士

山本常朝

佐賀論語或は鍋島論語と稱せらる、『葉隠』の口授者

鍋島藩の士
享保四年歿
年六十一

武士道は君に仕へ國に盡くす教、神儒佛の諸教理を綜合した立派な道ではあるが、其の缺點は、他にかしづく者のみを律する所にある。

倉以來の諸勇士、例へば能登守教經、畠山重忠、由利八郎、楠木正成、新田義貞、菊池武光、新納忠元、加藤清正、山鹿素行、大石良雄、山本常朝等、多くの代表的偉人に光を添へられ、學說實際の兩方面から與へられた是等の夥しい寄與によつて、後には神儒佛すべての徳目を一つに合はせて集大成した様な大組織の道徳となつたのである。

武士道はかやうに、本來は身を捨て、君に仕へ國に盡くす教であり、後に發達しては神儒佛の諸教理を綜合したやうな大道にもなつたので、非常に立派な道ではあるが、本來の第一義をいふと、公卿道とは正反對に、かしづく者のみを律して、かしづかれる者、人を使ふ者を律し得ざる片手落の道徳である。此の本色は、已に此の新道徳建設の大立者とも見るべき源頼朝に現はれて居る。『吾妻

鏡の初めに、かう書いてある。頼朝は石橋山に旗揚をする前に、おもなる勇士を一人づつ密室に呼んで、慇懃に合力を頼んだ。

「各、一人づつ次第に閑所に召し拔んで、合戦の間の事を議せしめ給ふ。未だ口外せずと雖も、偏に汝を頼むによつて仰せ合はせらるゝの由、人毎に慇懃の御詞を竭くさるゝの間、皆一身拔群の御芳志を喜んで、面々に勇敢を勵まんと欲す。是れ人に於いて獨歩の思を禁ぜらると雖も、家門草創の期に至つては、諸人の一族を求めしめ給ふ御計也。然れども眞實の密事に至つては、北條殿(時政)の外之れを知る人なし。」

と、かういふのである。頼朝に頼まれた臣下等は主君を信じ、一身を獻げて居るけれども、頼む君主は權謀術數のカラクリをやつて居るのである。そして謂はゆる武士道は、君に仕へる臣下を律するけれども、臣下を使ふ君主を律することが出来ないものである。

片手落ではないか。

頼朝はさすがに不世出の英雄である。彼れは常に隙間の無い眼光を以て臣下の行動を監視した。而して彼れの命令には秋霜烈日の威嚴があつた。彼れの如き豪傑があつたればこそ、臣下の武人等も忠勤を勵んで、新道德の武士道が立派に成立したのであらう。けれども主君たる頼朝彼れ自身の行動は、甚だ非武士道的なもので、或は身勝手な都合により、或は野心の指示によつて、人を賞し、人を罰し、又人を殺した。彼れがさまでの理由なくして範頼、義經の二弟を殺したるが如きは、いかにも残忍背倫のむごたらしい仕方であるが、武士道は之れに對して何等の制裁をも加へることが出来ないのである。

武士道の片手落は此の通りで、あれほど偉大なる頼朝でさへさうであつたとすれば、彼れ以下の平凡な、横暴な、若しくは利己的な

君主、將軍、大名の場合は容易に推測されるであらう。父を國外に逐ひ出した武田信玄は、其の所謂「信玄百個條」の中に於いて、

一、對父母聊不可不孝事。 論語曰、事父母能竭其力。

と云つて居るではないか。聖堂に於いて得意に經書を講じて聖人の道を宣傳した將軍綱吉は、公私内外の兩方面に於いて其の宣言を裏切つた無数の不善なる行爲を敢てして居るではないか。不義は御家の法度と云つて、臣下に對しては其の法度を嚴重に行ひながら、大名自身はほしまゝに不義放埒を行つて、何人にも咎められないではないか。彼等は臣下に惡事を強ひて居りながら、善言を進める忠義の臣下を、言下に手討にするではないか。多少の差こそあれ、封建時代の君主といふ者には、殆んど凡てに此の傾向があつたのである。

かやうに武士道は身を捨て、君に盡くし、武力を養つて國を守

紳士道は公卿道
と武士道とを兼
ね合はせた道
で、其の特色は
立憲的合理的と
いふ點にある。

り人を助くる道で、其の本義に於いても非常に尊い道であり、殊に磨かれた形に於いては實によく備はつた道ではあるけれども、本來の成立が、人にかしづき、人に使はれる爲めに出來た道德である爲めに、唯だ下に附く者のみを律して上に立つ者を律し得ぬといふ缺點がある。かういふ不公平な道德文化は、いかに立派な要素を含んで居るにせよ、その儘長く榮えしむべきものではあるまい。

明治に現はれ、大正、昭和と引きつゞいて發達して來た紳士道は、恰も公卿道と武士道とを兼ね合はせ調和させたやうなもので、其の基本の特色は立憲的、合理的といふ點にある。此の道が如何にして成立つたかについては、上から與へたとも見られ、下から求めたとも考へられ、或は上下の要求が一致した結果とも見られるであらうが、とにかく此の新しい國民道の特色は、上も、下も、使ふ者も、

此の新大道に對して明治大帝の示させ給うた大模範。

使はるゝ者も、等しく憲の示す所に従ひ、道理の教ふる所に隨つて行動するといふ所にある。此の新らしい大道を、御身親ら模範となつて明らかに國民に示させられたのは、畏くも明治大帝であつた。大帝は憲法發布の御告文に於いて、畏くも
朕力現在及將來ニ臣民ニ率先シ此ノ憲章ヲ履行シテ愆ヲサラムコトヲ誓フ庶幾クハ神靈此レヲ鑒ミタマヘ
と仰せられて、臣民と共にどころか、御身親ら率先して履行すると御誓ひになつて居るのである。そして大帝は此の御言葉を一々御實行の上に現ぜさせられて居るのである。大帝は年毎の眞夏にも、困窮して居る人民の上を思ひやり、侍臣等がたつて申す避暑の御勧めにも従はせられずして、
年々に思ひやれども山水を
汲みて遊ばむ夏なかりけり

高崎正風

明治時代の歌人
御歌所長
樞密顧問官
明治四十五年歿
年七十七

と詠ませられたといふではないか。眞夏、眞冬に側近の人達が暑さ寒さを訴へると、百姓や兵士の上を思ひやれ、暑さも寒さも忘られるであらうぞと仰せられたといふではないか。明治二十七八年役には、廣島の大本營の粗末な一室に八ヶ月間の御不自由を忍ばせられ、或る時侍臣が安樂椅子を御進めしようとする、戦地に安樂椅子があるか。と云つて、御却けになつたといふではないか。高崎正風翁が御歌所の長として歌道の御相手を仰せつかつた時に、萬一にも風流道の御すさみが御政治向きの御妨げになる事があるやうでは御免しを蒙ります。と奏上すると、心得たと仰せられ、そして、各省から奉つた鳥の子紙の奏上袋を、御手づから切り開かせられては、御政事の合間々々に、その裏に御製を御書きつけになつてゐたといふではないか。殊に崩御の年の夏には、埼玉で行はるゝ陸軍演習の御統監を願ふ筈で、其の筋が、片田舎へ行幸の上、引

續き御駐泊を願ふ事を恐懼の至りとして、毎日宮城から出御のやうに願ひ出でると、いつ迄も御裁可にならず、それで士卒等と辛苦を共にすべき大元帥の職務が勤まるか。と仰せられたといふてはないか。是等は皆大帝が、臣民と同じく立憲の大道を踏まれ、合理の生活を営まうとなされたので、實に新道德の理想的模範とならせられたのであらうと拜察するのである。

之れにつゞけるのは畏れ多いが、近年我が諸大學の標榜する建學修身の綱領などに、或は「獨立自尊」といひ、或は「學問の獨立」模範國民の養成などいふ事の現はれたのも、其の根本義の一つは、恐らく名々の人格を重んじて、お互に強ひず強ひらるゝことなく、彼れも我れも共に従ふべき道理に従つて行動するといふのであらう。或は國憲に従ひ、學問の示す道理に従ふ以外には、何ものにも強ひられずして、自由に誠實に國家に盡くす國民即ち模範國民を養成

するといふのであらう。而して斯様な指導標語の代表學園に唱へられて來たのも、一つは此の新國民道が暗々の裡に力を得て來た結果に外ならぬことと思はれる。

諸道推移の根本
義は、要するに
大きな日本、立
派な日本人を作
らんが爲め。

以上、我々は公卿道及び武士道の長所短所を論じ、此の先行二大國民道の長所を合はせて大調和を成したものが即ち紳士道である。人を使ふ者本位に偏つた、かしの道徳と、人に使はれる者本位に偏つた、かしの道徳との中間を行つて、使ふ者も使はるゝ者も、君臣、上下、官民、資本主労働者、悉く憲に従ひ道理のまゝに行動するのが、此の新國民道の教ふる所であると云つた。かういふと、いかに我が過去の歴史的由緒の二大道にケチをつける様であるが、しかし大きい目で離れて見、又よく味はつて見ると、こゝに「日本」といふ、建國より永劫に亘つて存在する大きな活物があつて、それ

を立派に發達させ、その本領を發揮せしめんが爲めに、至上者が、先づ初めには、其の持前の性情のまゝ、刺激のまゝに勝手な行動を取らせて見、そして第二段の専門選擇期に入るを待つて、感情、文藝、本位の生活を十分に試みさせたのであらう。世の中が謂はゆる涙の谷で、苦しい艱難境があり、同情すべき悲惨事があればこそ、儉約を勧め、苦行を積み、命をかけて戦争などをもするもの、四海の同胞が皆同様に無事息災ならば、お互に手を取つて十分樂しみ合ふのが人間の理想ではないか。平安朝はつまり、かういふ方面に於ける國民の能力を極度に發揮させて見たのであらう、そして公卿殿上人といふ一階級が此の理想實現の選手と擇ばれて、面倒な生活費や軍事やに氣を振らずに、其の方面に専心せしめられたのであらう。武士道も同じ事、國民の備へた獻身性、人にかしづくといふ美しい性質の種々相を見よう、其の頂巔を極めようとして、其

の方面の開拓に極度の努力を試みさせたのであらう。そして武士といふ一階級が此の新理想實現の選手となつて邁往勇進したのであらう。かくして此の二大道が成立し、二つの相反した極端なる性能の試練が濟んだので、今度は是等を打つて一丸とした一大新道徳、新文化の建立を試みたのであらう。かう見ると、今迄の歴史現象は、どれもこれも、つまりは、大なる日本人^でを出來^かす爲め、理想の日本を建立する爲めに、個人、社會、時代のいづれもが、名々其の得手々々から御國に盡くし、御國の大成に努力したといふ事になるのである。是非すべきではなくして、皆其の骨折貢獻を感謝し表彰さるゝことになるべきである。

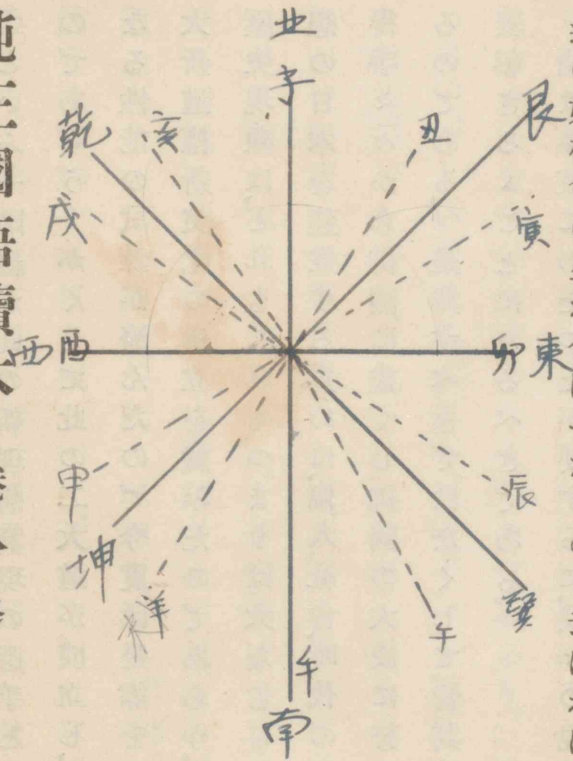
論は多岐にわたつたが、要するに、我々の現に見つゝ、行ひつゝ、而して其の完成に努力しつゝ、ある紳士道は、過去に完成された二大國民道を打つて一丸とした大調和の大文化、大道徳で、少なくとも

萬歳一遇の好機會に生れ合はせた吾々の幸福。

我が國に於いては、未だ曾て現はれたことのない大道である。従つて此の大道の完成に努力することの出来る吾々は、實に萬歳一遇の好機會に生れ合はせたものと云はねばならぬ。

純正國語讀本

卷八終



昭和八年八月十七日發行
 昭和四年四月九日發行
 昭和四年四月九日發行
 昭和四年四月九日發行
 昭和七年十二月十日發行
 昭和八年八月十七日發行

(新制版)

純正國語讀本 卷八

定價金六十錢

不	覆
製	製



編纂者 五十嵐力
 發行者 早稻田大學出版部
 印刷者 東京市牛込區榎町七番地 五十嵐良晃

東京市澁橋區戸塚町二丁目五十八番地
 早稻田大學出版部
 代表者 山田謙吉

發行所

東京・早稻田

早稻田大學出版部

電話牛込三四五番・三四六番



清
留
年
月
日
交